主は、生きておられる

Unser HERR lebt



graph magazine 2022 vol. 58

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

vol. 58 定価100円（税込み）



主は、生きておられる

Unser HERR lebt

メッセージ

4 イエスの救い（7） 御霊とはどのようなお方か
ゴットホルド・ベック

22 救いによる主の大きな愛　宮崎 文男

6人の証し

33 とるに足りないこの私でも
救い出して下さいました　原 八朗

46 汝静まりて、われの神たるを知れ　浜田 美鶴

57 主は呼び続けておられた　梅野 和美

65 主の恵みは、私に十分です　犬塚 大資（だいすけ）

75 主のご計画だけが成る　砂川 夫佐子

88 神の国はあなたがたのただ中に　渡辺 美和子

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

ゴットホルド・ベック

前回、私たちは主なる神の永遠のご予定について考えました。神はなぜ人間をお造りになられたのでしょうか、主の永遠の昔からの「創造」におけるご予定とは何だったのでしょうか。それは第一に、人が神の性質にあずかるため、第二に、神のご愛に報い応えるため、第三に、永遠のいのちを得るためです。これが、人間を造られる前に主なる神が持っておられたご予定でした。

次に、「救い」における神の永遠からの予定とは何だったのでしょうか。イエス様はどうして尊い血潮を流し、十字架の上で死なれたのでしょうか。これについては消極的な面として二つあります。

まず一つには、アダムが失ったものを回復し、もとどおりにすることです。すなわち私たちの罪の問題を解決するためです。もう一つは私たちの古い人、罪の性質を解決するためです。このためにイエス様は犠牲の死を遂げたのです。

今までに私たちはこのことについて詳しく学んできました。簡単に述べるなら、私たちは何をなしたのか。罪を犯した。罪を消すために、主イエス様の血潮がある。それを信じるなら、罪の赦しの確信が与えられる、ということです。聖書は言っています。

「御子イエスの血は、すべての罪から私たちをきよめます。」

（1ヨハネ　1・7）

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、…

（詩篇　32・1〜2）

第二に、私たちは何者なのか。罪人である。罪の性質を持つ者である。その解決の手段は主イエス様の十字架です。十字架を信じる者は、まことの解放、罪の力からの解放を経験することができるのです。

しかし、主イエス様の死には、積極的な面もあります。前に述べた消極的な面だけではなく、主なる神の永遠からのご予定が成し遂げられるためにも必要だったのです。ご自身のいのちを与えることにより私たちに永遠のいのちを得させるために、主イエス様は死に向かわれたのです。これは積極的な面です。

「キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた」とエペソ人への手紙に書き記されています。主イエス様の死によって、堕罪する前のアダムが持っていたものより、私たちはもっともっと多くを持つようになったのです。罪が赦され古い人が殺されたばかりではなく、神の永遠のいのちにあずかる者とされました。そして永遠のいのちを持つことにより、神の子どもとされ、主イエス様の兄弟とされたのです。主イエス様を心に受け入れた者一人ひとりが、神の家族の一員とされたのです。何というすばらしい救いの御業でしょうか。

さて、前々回まで私たちは、どうしたら実際にイエス様の似姿が私たちの内に形造られ、あこがれの勝利の生活に達することができるのか、またどうしたら信仰生活が前進するのかについて学んできました。これらの問いの答えは、第一に霊的に知ること、第二に信仰の計算をすること、第三に自分を神にささげ尽くすこと、そして第四に、御霊によって歩むことです。そこで今回は「御霊とはどのようなお方であるか」をご一緒に考えてみたいと思います。

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

1. すばらしい賜物

今より百数十年前に作られた世界地図を見ると、アジア、アフリカ、オーストラリアのある部分は白いままです。その説明として「この地方はまだ調べ尽くされていない」と書かれてあり、境界線も実線ではなく点線です。また地図によって、都市の位置もまちまちという状態です。

同じように、クリスチャンの経験においても白いままの未知の世界がたくさんあるのではないでしょうか。とりわけ御霊についての知識は乏しいようです。エペソの信者たちがやはりそうでした。パウロが彼らに、信じた時に御霊を受けたかと聞くと、彼らは「聖霊のあることを聞いたことさえありませんでした」（使徒19・2別訳）と答えたのです。御霊様の世界は、それまでエペソの信者たちにとって未知の世界でした。

今日、クリスチャンに「あなたはいつ聖霊を受けましたか？」、「御霊様を体験的に知っていますか？」、「御霊様はあなたにとって現実のお方ですか？」と聞くと、答えられない方が多いようです。彼らは、神は全宇宙の創造主であり、自分の父であり、全能で愛に満ちた方である、と心から言うことができます。主イエス様のことも身近に覚えていて、イエス様は私の救い主であり、私の持つただ一つの宝だと言います。ところが、いったん御霊様について尋ねられると、知識は持っていても実際には不確かで漠然としたものにしか感じていないように見受けられます。

しかし実は、御霊様と私たちキリスト者の間の関係は、霊的生活、信仰にとって欠くことのできないものなのです。新約聖書を読むと、初代教会の兄弟姉妹にとって御霊様はほんとうに現実的なお方だったことがわかります。彼らは御霊様に教えられ、満たされ、導かれていました。この三つの点に関して聖書を見てみましょう。

第一に初代教会の兄弟姉妹は御霊様によって、なすことを教えられていました。彼らが御霊様に語りかけられたということは、使徒の働き8章29節、10章19節、13章2節に書いてあります。

> 御霊がピリポに、「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。（使徒　8・29）

「御霊が…言われた」、つまり命令したと書いてあります。また、

> ペテロが幻について思い巡らしているとき、御霊が彼にこう言われた。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」（使徒　10・19～20）

ここでもペテロに「御霊が…言われた」、そして御霊がこの三人を「遣わした」と書いてあります。さらに、

> 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われた。（使徒　13・2）

ここでも「聖霊が…言われた」とあります。このような箇所を見るとわかるように、初代教会の兄弟姉妹はほんとうに自分たちがなすことを御霊から教えられていたのです。

二つ目に、初代教会の兄弟姉妹は御霊様に満たされたということが、使徒の働きをみるとわかります。

> すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。（使徒　2・4）

> 彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだ

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

した。　（使徒　4・31）

弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。　（使徒　13・52）

このように確かに、当時の初代教会のクリスチャンたちは、御霊様に教えられ、満たされていたのです。

そして三つ目に、初代教会の兄弟姉妹は聖霊によって神のみ旨に導かれたことが、使徒の働きに書かれています。

聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷も負わせないことを決めました。　（使徒　15・28）

それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。　（使徒　16・6～7）

このように初代教会を教え、満たし、導いた御霊様は、各集会に親しくご臨在なさって、神を信じない者には非常な恐れを抱かせ、すでに救いにあずかっている者には勝利と喜びを無限に与えたのです。

旧約時代には、御霊様を内に宿した人々は限られていました。神に特別に選び分けられた祭司、王、士師、預言者たちだけが御霊を注がれていました。ところが新約時代の今は、すべての救われた者がその特権にあずかることができます。神の友であるモーセや神の御心にかなった人ダビデ、力に満ちた預言者エリヤに臨んだのと同じ御霊様が、今日主を信じる一人ひとりに内住なさるのです。新約時代のすべての真のクリスチャンは、旧約時代に特別に選び分けられた神の器と同じ水準の立場に置かれているのです。ローマ人への

手紙5章5節に次のように書き記されています。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。　（ローマ　5・5）

「私たちに与えられた聖霊」とあります。8章9節にはこう書いてあります。

けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。　（ローマ　8・9）

後半に「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」とあります。私たちに与えられているすべての賜物は、キリストにあって私たちに与えられます。エペソ人への手紙1章3節を見ると、御霊様の賜物はもうすでに、今、ここにあるということがわかります。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。　（エペソ　1・3）

この聖句では過去形になっています。神はもうすでに、私たちを祝福してくださいました。キリストにある主の賜物が、もうすでに私たちのものとなっているのです。このことを個人的に、自分に起こった事実として受け取らなければなりません。

2. 個人的に受け取ることの大切さ

愛する兄弟姉妹、みことばを聞いたら、主の賜物を個人的に自分のものとして受け取る段階にいたらなけ

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

ればなりません。多くの人々は、その賜物を個人的に受け取るには何をしたらよいかと聞きます。これに答えるために、第一に注がれた御霊様について、第二に内住の御霊様について分けて考えてみたいと思います。

注がれた御霊

使徒の働き2章33節を見てみましょう。

ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。（使徒　2・33）

「この聖霊をお注ぎになった」と記されていますが、このみことばの中には三つの重要なことが含まれています。一つは、イエス・キリストが救いを成し終えて、高く引き上げられたこと。二つ目に、イエス様は約束の御霊様をお受けになったこと。そして三つ目に、この約束の御霊を、イエス様が信じる者に降り注がれたことです。なぜ御霊様が注がれたのか、このみことばを見るとはっきりわかります。弟子たちが祈ったからそうなったのではありません。主イエス様が高く引き上げられ、御父から御霊様をお受けになったからです。

私たちの場合にも、このみことばの事実が当てはまります。もし私たちが主を信じ受け入れほんとうに救われているなら、すでに御霊様は私たちの上に注がれているのです。私たちがあれやこれやと何かをすることによって御霊様を受けるのではありません。そうではなく、主イエス様が高く引き上げられたことにより、御霊様が注がれたのです。

あなたの罪はいったいどうして赦されたのでしょうか。あなたが熱心だったからでしょうか。あなたが自分の罪を告白したからでしょうか。そうではありません。主イエス様があなたの罪を引き受けて、あなたの代わりに罰を受けて十字架で亡くなってくださったからです。

また、あなたはなぜ、新しいいのちを受けることができたのでしょうか。集会に集まったからでしょうか。聖書を読んだからでしょうか。違います。主イエス様がよみがえってくださったからです。

では、なぜキリスト者全員が、キリストにあって御霊様を受けることができたのでしょうか。私たちがあのこと、このことをやったからでしょうか。またはあのこと、このことを止めたからでしょうか。いいえ、そうではありません。私たちの主イエス様が、「高く引き上げられた」からです。御霊様が降り注がれたのは、主イエス様が高くされた証拠です。五旬節の出来事は、主イエス様が主の主、王の王として、諸々の天よりも高く引き上げられた証拠です。

あのナザレのイエスは人間で、ただ単に自分の考えで十字架にかかったのでしょうか。それとも、全人類の救い主として十字架におかかりになったのでしょうか。どうすれば知ることができるでしょうか。私たちの上に注がれた御霊様によって、それがわからされるのです。主イエス様は油注がれた者（救い主・メシヤ）です。使徒の働き2章36節を読みましょう。五旬節の日に、ペテロがユダヤ人たちに向かってこう語っています。

ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。（使徒　2・36）

主イエス様が高く引き上げられたことにより、信じるあなたは聖霊を受けました。信者として御霊様を受けていないはずがありません。

繰り返し言いますが、私たちはどのようにして罪の赦しをいただいたのでしょうか。私たちが集会に集い、熱心に祈ったからではありません。主イエス様が、十字架で血潮を流してくださったから救われたのです。ヘブル人への手紙9章22節に、「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです」と書いてあります。救

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

いに至るただ一つの道は、主イエス様の血潮です。主イエス様の血潮があなたの罪のために流されたのだということを知り、認め、それを心から感謝した時に、救われたのです。

御霊様も同じ方法で受け入れたのです。あなたは、主イエス様が復活し、高く引き上げられたことを信じました。その時あなたは御霊様をお受けしたのです。もしあなたが真のクリスチャンなら、イエス様の血潮が流されていて、なお罪が赦されていないということはあり得ません。同じように、主イエス様が高く引き上げられているにもかかわらず、あなたが救われた者として聖霊を受けていないということもあり得ません。

人は、「そうは言っても私は何も御霊について経験していないので、立場としてはすべてが与えられているとしても、実際には御霊を持っているとは言えないのではないですか?」と主張するかもしれません。

どうしても私たちは、御霊様を個人的に自分のものとして受け取らなければなりません。このすばらしい賜物を受け取るには、神の永遠の事実に私たちの心の目が開かれなければなりません。

私たちは、主イエス様がもうすでにすべてを成し遂げられたことを感謝した時に、救いをいただきました。同じようにもしあなたが、主イエス様の高く引き上げられたことを心の目で見て、それを感謝するなら、御霊様の力を経験するはずです。主イエス様は、私たちのためにご自分のいのちをささげ尽くされたのです。この事実を心の目で見る時に、あなたは救いのためにもがくことをやめるはずです。そして主の救いに自分の身をゆだね、豊かな赦しをいただくことができるのです。

主イエス様は高く引き上げられ、約束どおり御霊様を教会の上に降り注がれました。もし私たちがこの事実を心の目で見るなら、「御霊様をください」と叫び求める努力をやめることでしょう。もし私たちが、聖書に記されている神の永遠の事実を啓示によって知らされるなら、主は私たちに信仰を与えてくださいます。

そしてこの信仰により、神の事実が私たちのものとなるのです。

あるまだ若いクリスチャンが、「主よ。御霊を私にください」と祈り始めましたが、すぐにそれは誤りだと気がつき、「主よ。もうすでに私の内に御霊様を与えてくださったことを感謝します」と祈ったところ、御霊様の力を内に経験しその人の生活が変わってきたということです。

もうおわかりになったのではないでしょうか。天の宝を引き出す鍵は「信仰」だということです。罪の赦しをいただくためにも、聖霊を受けるのにも、必要なのは信仰です。主イエス様が私たちの身代わりとなって亡くなってくださったことを知り、信じ、感謝した時に、私たちの罪が赦され、神の御前に義とされました。

主イエス様が昇天された日のことを考えてみてください。主イエス様は地上での三十三年間、罪と汚れのこの世に住まれ、十字架の上で救いを成し遂げられ、よみがえり、昇天されました。主イエス様が天に昇られたその時、天では言い表わせないほどの喜びがあったのです。主イエス様はすべての名にまさる名を与えられ、高く、高く引き上げられました。主イエス様は今、天の父なる神の右の御座におられます。そこから二千年前に、一部の特別な人々にではなく全教会に聖い御霊様を降り注いでくださったのです。ですから、もう私たちは「御霊様を注いでください」と祈る必要はありません。今すでに私たちの内にいます御霊様を、心からお受けし、感謝すれば良いのです。

もし私たちの所に、まだ救いにあずかっていない方が来て救いを求めたなら、私たちはその人のためにすでに救いを成し終えた主イエス様を示して、共に祈ります。その時、その人が「イエス様は私の罪を赦したいのでしょう。私の罪をどうぞお赦しください」と祈るなら、私たちはその人が御救いにあずかったとは信じられません。しかしその人が、「主イエス様、あなたは私の身代わりとなって死なれ、私の罪を赦してくださ

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

使徒の働き2章38節に次のように書いてあります。

そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。（使徒　2・38）

真の悔い改めとはどういうことかと言いますと、一口で言うなら「趣味が全く変わる」ということです。

以前は罪を愛していたけれど、今はそれを嫌うようになった。以前は、この世は自分にとって魅力的だった。しかし今は、この世の快楽は自分を惹きつけない。以前は、クリスチャンになることが恐れであった。でも今は、クリスチャンであり、イエス様のものであることが無上の喜びである。以前は、あれこれ様々なことを努力して自分のものにしようとしていたが、今は追い求めるのは主イエス様だけとなった。以前には恥だと思いまた軽蔑していたものが、今は一番尊いものとなった。このような変化を経験した者が、まことの悔い改めをした人と言えると思うのです。

そして、ここでいうバプテスマは心の信仰の現れです。告白です。自分が主イエス様とともに十字架にかけられ、死んで、ともによみがえらされた事を信じる者は洗礼を受けることを求めます。

あなたは悔い改めて、周囲の人々に自分の信仰を告白したでしょうか。もしそうなら、罪の赦しと御霊の賜物をいただいているのです。けれどもあなたは、罪の赦しは受けているが、二番目の賜物である御霊様は受けていないと言うかもしれません。しかし聖書は、悔い改めと、洗礼つまり信仰の告白という二つのことを経験しているならば、必ず罪の赦しと聖霊の二つの賜物がいただけるとはっきり語っています。あなたは、「罪の赦しは受けているが聖霊は受けていない」とは言えないのです。

もしかすると、あなたは今日まで罪の赦しという賜物だけを感謝していたかもしれません。千円払って五百円の本を二冊買って、一冊を本屋に忘れて帰ったら、思い出してそれを取りに行くでしょう。その時もう一度、五百円を支払う必要はありません。ところが多くのクリスチャンは、せっかく受け取る権利のある二つの贈り物を一つしか受け取っていません。エペソの信者がそうだったのです。救いのみことばは受け取っていましたが、御霊様の賜物はまだ頂いていませんでした。もしあなたが二つの条件を満たしていても御霊様をまだ知らないのなら、主イエス様の御前に静まり、「主イエス様、私は二つの条件を満たしながら、一つの賜物しか受けていませんでした。あなたは高く引き上げられ、御霊様をすでに注いでいてくださいましたから、私も御霊様を受けていることを感謝いたします」と祈りましょう。そのとき、御霊様の力を体験的に知るようになります。

私たちは、主イエス様が天の御座に高く引き上げられ、全教会の上に御霊様を注いでくださったことを心

いました。感謝致します」と祈ったなら、その方の救いの確かさを私たちは認めるでしょう。御霊様についても同じです。あなたが「御霊様をください」と何十年祈っても変わりません。しかし、「主イエス様、高く引き上げられ、そこから御霊様をお下しくださったことを感謝いたします」と、祈って御霊様を心にお迎えするなら、あなたはその力を自分のものとすることができるのです。

主イエス様は、ずっと後になってから主となられるのでしょうか。そうではなく、主イエス様は今、主の主であられるお方です。ですから御霊様を待ち望む必要はなく、あなたは信者としてすでに聖い神の霊をいただいているのです。

心の目で神の事実を見て、そこから湧き出る信仰が大切です。すでに主イエス様が高く引き上げられ、私たちの上に御霊様をお注ぎくださったことを心の目で見るなら、私たちはこのすばらしい賜物を感謝しないではおられないはずです。

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

から感謝し、御名を褒めたたえたいものです。もし私たちが単純にこの事実を信じるなら、私たちは贖われた者というだけでなく、「御霊は自分の内に生きておられる」と、はっきりした確信が与えられるのです。

内住の御霊

最後に、この内住の御霊様について考えたいと思います。

愛する兄弟姉妹よ、私たちの内にある宝がどんなにすばらしいお方か知っておられるでしょうか。私たちの内に宿りたもう御霊様が、神であられることを知っているのでしょうか。聖霊は単に神の影響力、力、感情などではなく、人格そのものです。聖霊は創造主である神、主イエス様と同じ神そのものです。

聖霊は次のような名で呼ばれています。真理の御霊、恵みの御霊、いのちの御霊、約束の御霊、力の霊、愛の霊、節制の御霊、栄光の御霊、聖めの霊、知恵の御霊、啓示の御霊、信仰の御霊、主の霊などです。私たちの内に与えられた、このすばらしい贈り物をはっきりと認めておきたいものです。

私たちは、驚くべき富を心の内に持っているのです。私たちの内にある霊は、一つの偉大なる人格、偉大なる神であられるのです。私たちの内に宿っておられるお方は、私たちの神です。私たちはもちろん土の器にしか過ぎませんが、驚くべき宝、栄光の神を担っているのです。コリント人への手紙を見ましょう。

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。

（1コリント　3・16）

このコリントの信者たちは、御霊の現われを重んじて異言や奇跡を追い求めていましたが、キリスト者としての実際生活は実に乱れていました。御霊の力は彼らの上に働いていましたが、彼らの内に完全な働きをなすことができないままでした。これがコリントの信者の実状だったのです。彼らはもちろん聖霊を受けていましたが、成熟していなかったのです。

愛する兄弟姉妹よ、キリスト者は神の宮であり、御霊が内に宿っているという知識が、今日の私たちにもどうしても必要です。御霊によって神ご自身が私たちの内に住んでおられます。もし御霊が、確かに私たちの心に宿っているなら、父そして御子イエス様が私たちの内に宿っておられるのです。これは理論などではなく確かな事実なのです。

私たちの身に起こるあらゆる問題の解決は、私たちの内に宿っておられる栄光の主にあるのです。この事実に目が開かれるなら、私たちには一点の思い煩いも生じて来ないでしょう。パウロは、「何事も思い煩ってはならない、主は近い」と言っています。主イエス様は私たちの呼吸する空気よりも身近におられます。主イエス様は私たちの内に住んでおられます。この内住される主は、私たちだけではなく全地を揺り動かすことのできるお方です。御霊によって新しく生まれた人々は、だれでも栄光の主を担って歩いているのです。この驚くべき事実をはっきりと知っておきましょう。これを知る時、私たちはもはや軽率な行動をとることができなくなります。

例えばポケットに二十円しか持っていなければ、それを無くしてもたいして気に止めません。しかし二百万円を持っていたなら、いつも気にしてポケットに手を入れ、あることを確かめながら歩きます。あなたの持っている宝は、あなたの歩みを定めます。

イスラエルの民が荒野を患難に向かって旅した時、人々は天幕で生活をしていました。何百と設営された天幕で民は自由にふるまうことができましたが、ただ一つ中央にある神の幕屋では不敬虔なことをすると、たちどころに死ななければなりませんでした。幕屋は外から見ると他と何の変わりもありませんが、神が内に臨在される宮だったからです。

あなたが主イエス様を救い主として信じた時、何が

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

起こったかご存知でしょうか。神が聖霊を通してあなたの心の内に宿り、あなたを「神の宮」となされたのです。主なる神は、昔は天幕や宮にお住まいになりましたが、今は生きているキリスト者の心に住んでおられます。神ご自身が聖霊を通して、私たちの心の内に住んでおられるのです。御霊様が私たちの内に宿っておられ、私たちが神の宮であるという自覚に立つ時、軽率な行動や自分を喜ばせる生活は、自然に消えてなくなってしまいます。どこに行くにも御霊様が伴われます。あなたは聖書の知識を運ぶのではなく、神ご自身を運んでいるのです。

ところで、一つ大きな問題があります。いったいどうして、聖霊の力を体験している信者がそんなに少ないのでしょうか。それは、内におられる内住の主を恐れかしこんでいないからです。いったいなぜ、信者の間にはそれほどに差があるのでしょうか。ある信者は勝利の生活を送り、ある信者はいつも打ちのめされています。主イエス様のご臨在の多いか少ないかが、この結果をもたらすのでしょうか。そうではありません。すべてのキリスト者は内に御霊様を宿しています。

肝心なのは、内住の主を心の目で見るかどうかであり、このお方を心の目で見ることができるなら生活が全く変わってきます。あるクリスチャンは、御霊様の支配に自分をゆだね、またあるクリスチャンは自分が自分の主になっています。信者の間にある大きな差は、内住の御霊様を主としていないところから来るのです。

もっとも大切なのは、主の絶対的なご支配です。コリント人への手紙第一からお読みしたいと思います。

> あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。
>
> （1コリント　6・19～20）

もし私たちが内住の主を知っているなら、自分を全く主に明け渡し、主の支配にこの身をまかせなければなりません。自分が神の宮であることを知ったその瞬間、自分の体は自分のものではなく、神のものであることを知るのです。

私たちは神様に対して、自分自身の権利を何も持ち合わせていません。私たちは意識して御霊様のご支配に身をゆだねたのでしょうか。もしイエス様が私たちの心の内で主となっていなければ、御霊様は働くことができません。私たちのすべてが主の御手の内にまかせられていなければ、御霊様は私たちを導くことができません。私たちがすべてを主に明け渡す時に、御霊様の支配が私たちの内に臨み、聖霊が私たちの内に溢（あふ）れ、導くことができるのです。

私たちは「自分と自分の権利を欲しない。私はあなたの他に慕うものはない。御心のままに動きたい」という、完全に主におゆだねした態度になっているでしょうか。

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

ある若い伝道者がいました。この人は未だ信仰のない女性を愛し、何とかして結婚したいと思い、「主よ、どうかこの方を妻として与えてください」と祈りますが、主の許しがありません。最後には、「チベットへでもどこへでも宣教師として行きますから、この女性を妻として与えてください」と祈りますが、もちろん主は許されません。遂に、この伝道者はすべてを主にゆだねて、その婦人を断念した時に主の恵みはその伝道者に注がれ、非常に祝福されたご奉仕に入ったということです。

すでにイエス様によって罪を赦された罪人と、まだ罪を赦されていない罪人の間には、同じ罪人でも大きな差があります。同じように、自分の身を全く主のご支配にゆだねたクリスチャンと、御霊様のご支配を拒んでいるクリスチャンの間には大きな差があります。

私たちは聖霊の力を経験したいと望んでいるのでしょうか。私たちを通して多くの人々が救われ、主のみもとに導かれることを願っているのでしょうか。

もしそうであるなら、私たちは何かの感じや現われを待っている必要はありません。ただ自分が聖霊の宮であり、内に御霊様が宿っておられることを感謝しさえすれば良いのです。聖霊によって満たされる者は、十二の実を結ぶと聖書は言っています。

御霊の実は愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。（ガラテヤ　5・22～23）

光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。（エペソ　5・9）

主の御霊のあるところには、自由があります。（2コリント　3・17）

もう一度、繰り返します。主の御霊によって満たされる者は、十二の実をもたらします。愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制、正義、真実、自由です。

聖霊は真理の霊です。真理の霊としてそれは人を悔い改めに導き、へりくだりの心を与え、砕かれた魂を与えます。聖霊はいのちの霊です。いのちの霊として、神の霊は私たちをよみがえらせ、力づけ、解放してくださいます。聖霊は祈りの霊です。祈りの霊としてそれは、私たちに賛美と礼拝ととりなしの祈りをするように導きます。聖霊は真理の霊であり、いのちの霊であり、また祈りの霊です。

私たちの生活を振り返ってみてどうでしょうか。私たちは聖霊によって動かされているのでしょうか。聖霊が私たちに臨んで、私たちの考えや行いに影響を及ぼしているのでしょうか。聖霊よりも人間のほうが影響を与えているのでしょうか。主イエス様の愛こそ、私たちにとって第一のものとなっているでしょうか。それとも他にもっと良い目的でもあるのでしょうか。

主イエス様を信じることによって御霊の賜物を受ける人は比較的大勢いますが、御霊の満たしを受ける人はほんとうに少ないのです。主イエス様を受け入れた人は大勢いますが、主イエス様と共に歩む人は少ないのです。光に来ることだけが大切なのではなく、光のうちを歩むことがキリスト者にとって大切です。イエス様の御もとに来るだけではなく、主イエス様にとどまること、イエス様にあって歩むことが大切なのです。新しいいのちを持つだけではなく、新しいいのちを持って新しい歩みをすることが必要です。信仰をもって主イエス様に近づくだけではなく、毎日の信仰生活によって、見えるところによらず信仰によって歩むことが大切なのです。御霊の賜物を持つだけでなく、御霊によって歩むことが大切です。召しを受けるだけでなく、召しにふさわしく歩むことが必要です。最後にもう一度コリント人への手紙第一、6章19節、20節を読んで終わります。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。（1コリント　6・19～20）

イエスの救い（7）　御霊とはどのようなお方か

本メッセージは、「ロバの子サーバー」の「ベック兄 暦年ファイル」に録音されています。

次回掲載予定は、「イエスの救い（8）おきての支配からの解放」です。

救いによる主の大きな愛

宮崎 文男

あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。（イザヤ　43・2〜3）

旧約聖書でイザヤが書き記した預言書の一節です。このイザヤ書には、私たちの救い主であられるメシヤについてイザヤに啓示された内容が分かりやすく書かれています。3節に「わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主である」と書かれています。新約以降の教会時代を生きる私たちにはイエス様だけが天の御国へ導いてくださるただ一人のお方であり、神の恵みを受けるための唯一の方でもあります。新約聖書ではイエス様が、道であり、真理であり、そしていのちであることを教えています。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。（ヨハネ　14・6）

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。（使徒　4・12）

このように、イエス様が十字架についてそのいのちをささげてくださり、私たちの罪のためにその御血という高い代価を支払って私たちを買い取ってくださいました。そして、「完全なる救い」を成し遂げてくださいました。

私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにしたばあい、どうしてのがれることができましょう。この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、そのうえ神も、しるしと不思議とさまざまの力あるわざにより、また、みこころに従って聖霊が分け与えてくださる賜物によってあかしされました。（ヘブル　2・3〜4）

このみことばにあるように十字架についてくださったイエス様を良く知り、イエス様がくださる救いを得る事が出来る私たちのこの地上での生涯は本当に驚くほどに短いものです。死んだ後に二度目のチャンスは巡ってきません。

聖書は人々が読んだり聞いたりし、心を打たれて悪から立ち返り、メシヤ（救世主）に赦しと癒しを求める事を願って書かれたものです。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。（エペソ　2・4〜5、10）

話は少し飛びますが、月日の経つのは本当に早い

もので、二〇一一年に起きたあの東日本大震災から二〇二一年三月十一日で、十年が経ちました。私は特にあの大震災がきっかけでイエス様に救われることが出来ましたので本当に感慨深いものがあります。

私は、あの東日本大震災が発生した時、宮城県女川町にいて勤務中に震災にあいました。この世の出来事とは思えないほどの津波で、街並みの八割が流されて無くなり、仕事でお世話になっていた方や友人・知人も多くの方々が亡くなりました。その中に私が中学校でバレーボールを教えていた教え子がいました。これからという十五歳、十六歳の若者とその父親、母親が津波で亡くなりました。私は、将来のある若者が亡くなり、六十歳近いすでに人生の下り坂にさしかかった自分が生かされたことに納得ができず、心が闇の中に入ったまま前へ進むことが出来なくなりました。「この世には、なぜ神様も仏様もいないのだろうか」と苦しみ、生きることに悩んでいました。その苦しみは時間が経つにつれてどんどん心の奥深くに沈んでいき、暗い毎日を過ごしていました。

あなたは、盲人が暗やみで手さぐりするように、真昼に手さぐりするようになる。あなたは自分のやることで繁栄することがなく、いつまでも、しいたげられ、略奪されるだけである。あなたを救う者はいない。

（申命記　28・29）

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。

（ハバクク　3・17）

当時は何をしても心が晴れることはなく、生きていることもただ苦しく、ただ漫然と生きているだけで、夜、眠っていても何度も津波を思い出し、目が覚める毎日でした。そんなことが震災から一年以上経っても続いていました。

二〇一二年十一月、震災から一年半が経った時に仙台でキリスト集会の「喜びの集い」があり、ベックさんが来られることを、すでに集会に通っていた妻から聞き、出かけました。私はベックさんに助けを求め、一緒に祈っていただき、主イエス様を信じ、救われました。

実は私が初めてベックさんとお会いしたのは、その年から十三年前の一九九九年九月に妻と北海道を旅行していたときで、小樽の硝子工場でのことでした。ベックさんは、札幌の「喜びの集い」のため北海道に来ておられ、いつもは滞在を延ばされることなど一切ないとのことでしたが、この年の喜びの集いの時だけは一日延ばされて小樽に観光に来られたと後でお聞きしました。

私たちはというと、北海道旅行の最中でその日は函館の観光をする予定で、朝はまだ函館のホテルにいました。しかし、低気圧が近づきこの日の函館は土砂降りの雨で観光が出来ないと判断し、予定を繰り上げ小樽に向かうことにしました。函館と小樽は二百五十キロほど離れており、小樽の天気を確かめたところ曇りの予報でしたので、朝、函館を出発し、四時間かかって小樽に着き、午後二時頃に硝子工場の見学をしていました。見学を終えて工場を出ようとしたとき、玄関から背の高い外人さんと数人の女性が入って来られたのです。私の後ろで、トイレから出て来た妻が「ベックさん！」と呼ぶ声が聞こえました。妻はその三か月前の六月に、信仰をもつ実の妹から誘われ、「ドイツ喜びの集い」に参加していたので、ベックさんとは面識があったのです。私は、はじめてお会いする方々で、妻の知人だろうと思いながら何も分からないまま、一緒に来られた方々とベックさんと記念写真を撮っていただき、最後にベックさんと握手をしてお別れをしました。その後、ベックさんとは直接お会いすることはありませんでしたが、握手していただいたベックさんの右手のぬくもりがずっと自分の右の手に残っていたのです。このことがあり、ベックさんに話してみようと思った

救いによる主の大きな愛

のです。

これが今振り返ると主は私のすべてをご存じであられ、私が十三年後に主を求めることを知っていて、ベックさんに会わせてくださっていたと後になって気づかされました。この小樽でベックさんとお会いできたことは、私たちが旅行の予定を繰り上げ、函館から小樽に行ったこと、硝子工場から出る時、姉妹がトイレに行ったこと、ベックさんが「喜びの集い」のあと、滞在を延ばされて小樽に来られたこと。いずれも主がなさったことと後になって気がつきました。主が私のために備えてくださっていたご配慮でした。

あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。（詩篇　139・3）

いと高き神が私に行なわれたしるしと奇蹟とを知らせることは、私の喜びとするところである。そのしるしのなんと偉大なことよ。その奇蹟のなんと力強いことよ。その国は永遠にわたる国、その主権は代々限りなく続く。（ダニエル　4・2〜3）

仙台「喜びの集い」の当日、ベックさんと一緒に主への祈りをささげた後、何もわからないまま会場の一番後ろの席で礼拝と福音集会を見ていました。集会の皆さんから「宮崎さんよく来られましたね。祈っていましたよ」と多くの方々に笑顔で声をかけていただき憂鬱な気分から解放され、肩の重荷がスーッと軽くなっていくのが分かりました。私は、本当に来て良かったと思いました。この日から、深い闇の中で止まっていた気持ちが長いトンネルから少しずつ出ることが出来ました。

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。（イザヤ　43・1）

あれから八年が経ち、あの時イエス様が新しい人に生まれ変わらせてくださり、今はイエス様がいつも一緒にいて明るい道を歩けるように守ってくださっていることを実感するようになりました。

ベックさんが以前のメッセージで次のように話されていたことを思い出しました。「主に救われて信仰生活に入った人は、二つの事柄がいつも並行していなければなりません。それは、信仰に満ちた心と、とがめの去った良心です。もし、咎めの去った良心を絶えず持ち続けなければ、私たちの信仰生活は前進しません。私たちは、日々、刻々イエス様の血潮の無限の尊さを味わい知らなければならないのです」。

私たち人間は、救われて信仰生活に入っても信仰に満ちた心はいっぱい持ち合わせているのですが、二つ目の咎めの去った良心を持ち続けることがなかなかできません。人をさばいたり、批判したり、いつも罪を持った性質が出てしまうのです。主はこのことから、すべてのキリスト者が成長をして前進するために一人ひとりに患難も用意してその人に合わせて訓練もしてくださいます。主はヨハネの福音書で次のように語られています。

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。（ヨハネ　16・33）

イエス様は、救われた私たちに始めから勝利の生活を与えられるのではなく、重荷を負って生きるとき、その患難の中にイエス様ご自身がともにおられ、私たちの重荷を負ってくださり、ともに患難を乗り越える

救いによる主の大きな愛

ことを通してイエス様による勝利の生活を体験的に与えてくださいます。

この私たちに与えられる患難には、経済や健康の問題、老後の生活、家族との問題と仕事の問題、将来の問題など数え上げればきりがなく、与えられるその度合いやその数はその人によってさまざまです。

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（マルコ　8・34）

私たちはすべて神様によって造られた者であり、神様の作品としてこの世に生を受けました。ところが、私たちは自我である罪の性質があるので、造り主である神様を自分の状況とは関係のない存在にしたり、知らず知らずのうちに私たちの心が神様から離れてしまったりして、自ら重荷を負うことになります。

あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。（黙示録　2・3～4）

しかし、神様は、その大きな愛によって私たちを包んでくださいます。この私たちにくださる主の大きな愛について、ルカの福音書十五章にたとえ話があります。簡単に説明します。

ある人に二人の息子がいました。弟の方が父親が健在なうちに、財産の分け前を要求します。父は要求通りに与え、そして、生前贈与を受けた息子は遠い国に旅立ち、そこで放蕩し財産をすべて使い果してしまいます。その息子は何もかも使い果たしてしまいました。さらに、その国に大飢饉が起こり、彼はユダヤ人が汚れているとしてだれもしたがらない豚の世話の仕事をして生計を立てることになります。そして、この息子は豚の餌さえも食べたいと思うほど飢えに苦しんでしまいます。その苦しさのあまり、父のもとにいた頃のことを思い出します。「父のところには食物のあり余っている雇い人も大勢いるのに、私はここで飢えて死のうとしている」。しかし、そう思った時、彼は我に返ります。「帰るべきところは父のところだ」と立ち返り、帰途に着きます。

彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」』こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』（ルカ　15・16～21）

17節に「しかし、我に返ったとき彼は、こう言った」とあります。この息子は散々放蕩し、みじめな境遇の中にあって、苦しさの中から本心に立ち返ったのです。目が覚めたのです。彼は本心に立ち返って、父のもとへ帰ろうと自分のしたことを悔い改めたのです。私たちも神様からいただく患難で重荷を負い、苦しみに遭います。言い換えると、神様から離れて勝手な生き方を続けてしまうと、生きる苦しみ、患難が覆ってきます。私が救われる前に経験したようにひどい時には生きることが地獄のようになってしまうこともあります。そこから、どうやって逃れることができるのかと途方に暮れた時、その苦しみを取り除くことができる最善の

救いによる主の大きな愛

道は放蕩息子が父のもとに帰ったように私たちも神様との関係において原点に帰ることなのです。父なる神様のもとに帰らなければなりません。20節で「まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き」と書かれています。父親は遠くからやって来るみすぼらしく見る影もない息子を見つけて走り出して行きます。父親は、この息子を心配し今日か、明日かと絶えず待ち続けていたのです。放蕩息子ではあるものの自分の子供としてその罪を赦し、悔い改めて戻って来るのを待っていたのです。父親の息子に対する大きな愛でした。そして息子も「もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください」と、心砕かれて悔い改めをもって父の元へ帰ってきたのです。父親は帰ってきたこの息子を全身全霊の愛で迎えました。

ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。

（ルカ　15・22〜24）

このように父親は、心から歓迎しました。「いいから着替えなさい。靴をはきなさい。手に指輪をはめさせなさい」。こうして息子として彼を受け入れました。何と深く大きな父親の愛でしょうか。ルカの福音書に書かれた放蕩息子の話は放蕩に生きた息子だけが主人公ではありません。この父親の深く大きな愛は私たちにも主へ立ち返ることの重要さと大切さを教えています。

主に救われてもなお自我が出てしまい主から離れてしまうことを私たちは繰り返してしまいます。しかし、主は諦（あきら）めずに私たちを何度でも受け入れてくださいます。私たちはイエス様が十字架に架かり流してくださった血潮の尊さを忘れてはならないのです。

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

（ガラテヤ　6・14）

私たちは、このイエス様の十字架の贖いと愛のゆえにイエス様に召されたのです。しかし、私たちは主から離れるがゆえに受ける問題や悩み、苦しみ、患難があり、重荷を負って生きています。しかし、主はこの重荷を負った私たちに「わたしのところに来なさい」と言ってくださっています。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

（マタイ　11・28〜30）

このように主は放蕩息子を迎え入れた父親のようにいつも大きな愛で私たちを包み込んでくださいます。私も主の大きな愛を経験しましたが、あの日私が小樽でベックさんと会えたのは主のご配慮であり、ベックさんがお別れの時に握手してくださったあの厚い大きな手は、神の手ゴッドハンドだったのです。私は今、主が救ってくださったことと大きなその愛とあわれみで導いてくださっていることに心から感謝しています。

また、私は、東日本大震災で「明日という日があたりまえのように来るものではない」ことを知りましたが、イエス様に救われて「明日という日は神様が当たり前のように作ってくださり、希望と糧（かて）がある」ということを教えられました。

私たちは、イエス様を通して神様に近づくことが許されています。そして、イエス様を信じて神様に近づ

救いによる主の大きな愛

く者は、永遠のいのちもいただくことができるのです。この信仰によって、私たちは希望を持ち、この世での人生も主がくださる平安によって生きることができます。

このように、不安をかかえてさまようような生き方ではなく、生かされていることにいつも感謝し、主に用いられることに喜びを持って、救いの確信の土台の上にしっかりと立てあげられた生き方をしたいものです。主は、私たちを愛し、日々導き、支えてくださいます。私たちは、すでに御手の中にあることに感謝し、主から離れないように主のくびきを負って、傲慢な自分を戒め、自我の罪をいつも悔い改めて、主が迎えに来られる日を待ち望みたいと思います。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。

（ヨハネ　5・24〜25）



宮崎　文男（仙台集会）

とるに足りないこの私でも救い出して下さいました

原　八朗



左から妻の万里子さん、八朗さん、ベックさん、長女の朋子さん
2004年4月10日、八朗さんの洗礼式で

私の救い

わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ　46・3〜4）

私は一九四七年一月、島根県で八人兄弟の末っ子で生まれました。男四人、女四人の構成です。一番上の姉とは十九歳の違いがあります。現在も全員が元気にしています。しかし、父は私が二歳の時に亡くなったため、父の記憶は全くありません。また、母は父の早逝で八人の子供を抱え、戦後間もない田舎といえども色々な面で苦労の毎日であったことが想像できます。

そのような子供時代を過ごし、一九六五年に工業高校を卒業と同時に首都圏の電気通信メーカに入社しました。会社は将来を見込んでコンピュータに傾注していたこともあってコンピュータのメンテナンス部門に所属となり、七か月間の厳しい研修の後、名古屋への配属が決まり転勤となりました。

私が就職した昭和四十年代の日本経済は右肩上がりの高度成長期でした。コンピュータも多くの会社に納入されてメンテナンスの仕事も繁忙を極め、深夜、休日の出勤はあたり前となっていました。今日の「働き方改革」を目指す社会に似ても似つかない残業百時間を越えることも常態化した日々でありました。それでも社会で最先端の仕事をしていると自負し会社と自身の成長を夢見て張り合いも感じて苦にもならず、むしろ楽しかったことを思い出します。しかし、顧客先での仕事柄どうしてもストレスは大きく、その解消のために少々遅い時間からでも夜の街に出かけて日付が変わってから帰宅することも度々でした。今から思えばよく体を壊さず、遅刻もせずに出勤できたものだと感心します。

そんな生活をする中で結婚を考えるようになり、出身地の隣町の方(万里子)とお見合いをすることとなりました。

私は名古屋で遠距離でしたから、数回会っただけで私の三十歳の誕生日に結婚式を挙げました。そして、長男、次男と長女の三人の子供にも恵まれ、家庭的には何も問題がないように思えていました。しかし、そう思っていたのは私だけのようでした。

その当時は銀行に常駐しながら大型コンピュータシステムを担当していました。前にも増して忙しく、責任も大きくなっていました。早朝の出勤、深夜まで作業しての帰宅、そして休日の出勤も度々でしたから家庭を顧みる余裕はありませんでした。

家には寝に帰るだけのような毎日が続いていました、当然、家族との会話もなくなり、一緒に外出することなど殆どありませんでした。

父親不在で三人の子供のことは家内にまかせっきりになっていました。後に聞くことになりましたけれども、家内はこの状況に耐えきれず鬱状態となって薬を飲んでいたと告げられました。そんな最悪な状態に気づきもしないで仕事一辺倒でした。

しかし、この崩壊した家庭にあわれみ豊かな主は福音を伝えて下さいました。

私たちが住むマンションに吉祥寺キリスト集会のご夫婦が住んでおられ、家内は子供会の活動を通してそのご夫婦のお宅で開かれる家庭集会に誘われ参加したようです。それからは子供達も集会に一緒に行くようになり、しばらくしてそのお宅のお風呂でベックさんを通して洗礼を受けたようでした。その時、娘は三歳でした。そんな大きな家庭の変化にも全く気づくこともなく私はマイペースの毎日でした。

しかし、私が休みで家に居る日曜日にもおかまいなしに四人は楽しそうに出かけますから、心の中では「くだらない新興宗教に入信したのではないか」と変な心配をするだけでした。そのような状況が続く中、正月休みにゴロゴロと自宅にいました。その時に、そのお宅のご主人が突然訪れて「一度、来てみませんか」と参加の誘いを受けたのでした。ためらいがありましたけれども暇を持て余していたものですから「伺います」と返事をしてしまいました。返事の裏には集会を疑問視していた為、この目で確かめたいとの思いが強かったのです。

玄関ドアを恐る恐る開けて部屋に招かれると大勢の方がおられ、ご馳走も並んでいました。案内された席に座り語られる話を聞きながら、気持ちはこの集団の善し悪しを見ていたように思います。結果的には悪いイメージが先立った疑問もなくなり、とりあえず安心して、早々に家に帰ったことを覚えています。

6人の証し

Unser HERR lebt

見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。（創世記　28・15）

しかし、私が神に心を向けることのなかった二十年の長い間も振り返ると、主なるイエス様は近くでいつも支えてくださっていました。

初任地の名古屋勤務の時代には一度家庭集会へ招かれました。このことがきっかけとなり、山陰の松江に移ってからの七年間は近くに集会もない中での生活でしたが主は憐れんでくださり、着任した翌年には家族全員で約千キロある道のりを御代田の福音センターへ集うよう導いて下さいました。また、島根の地で「喜びの集い」を開いて下さることもありました。このように、主は機会を捉えては家族とともに関わり、ご存在を示してくださいました。つぎの山口県での四年間

しかし、このように主に備えられた機会をせっかくいただいたにも関わらず、イエス様を信じる信仰に向かうことはありませんでした。

その後も家内から一緒に集会に行くよう勧められますが、自分には「神などに頼ることはない」との思いが強くあり拒んでいました。その一方でこの集会は家族に悪影響を及ぶすことはないと判断し、安心感を持ち気にしなくなってしまっていました。

今から思えば、当時は、妻から恵みの機会を得ながらも、仕事を優先にしたいと言う自己中心のわがままな気持ちがはるかに勝っていたと思います。

そして、次のような御言葉が聖書に記されているのも知らず、それから私の救いは二十年もの間、遠のいてしまうこととなりました。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。（イザヤ　55・6）

は宇部市で開かれた「喜びの集い」をはじめ、日曜日の礼拝の際、福音メッセージのために来られた集会の方を送迎する役目と共に車中での会話を通して主を忘れることがないように恵みの時を与えてくださいました。また、四国高松での四年間には、高知、高松で開かれた「喜びの集い」や、坂出キリスト集会に参加する妻や子どもたちによって、主から離れないようにつなぎとめてくださったように思います。

しかし、それでも主を仰ぎ見ることがなかった私に主からの督促状に思える病が与えられることになりました。

以前から時々自覚することもあったのですがそれが現実となってしまいました。病名は心臓の逼迫性発作を起こすＷＰＷ症候群でした。

頻脈の発作を起こして、救急車で病院に送られることが度々となり、仕事にも支障をきたすようになってしまいました。

大好きであったゴルフは禁止され、クラブも粗大ゴミに出され、夜の付き合いもセーブを余儀なくされました。仕事もこのような状態でありますから無理がきかず、心は落ち込み元気がなくなっていきました。

この状況が続く中で転勤の話を上司から告げられました。転勤先は思いもよらない本社の管理部門で顧客相手のない間接部門でした。仕事の内容はデスクワークであり、入社以来顧客相手の仕事しか知らない私に合いそうもなく迷いがありました。それ以上に、持病となってしまった心臓病への不安がありました。末の娘は高校三年生でしたから最低一年間の単身赴任は避けられません。また、単身生活は食事を含め問題点が頭をよぎりましたので、その場では直ぐに返事ができず後日回答することにしました。しかし、二日後には転勤を受けることができました。その時はまだはっきりと主を受け容れていない者ではありましたが、そこに、主の導きがあったと今では確信しています。

6人の証し

Unser HERR lebt

わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこでも、あなたとともにあるからである。（ヨシュア　1・9）

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

その後、それらの問題点はすべてが満足するかたちで解決に至りました。常時管理人が居る単身寮が備えられ、病気の治療は勤務地近くの病院で対応できるようになりました。また、単身生活の期間においても、主はキリスト集会の方々によって開催された「メサイア」コンサートや信仰を持つ家族を通して、主とのつながりを保たせてくださいました。

単身生活の終了後は私と家内は川崎市での生活、高校生であった娘は大阪の生活、長男、次男はそれぞれ広島、岡山での生活と四か所に別れた生活になりましたけれども恵みもいただきました。この期間、家内は引越しで吉祥寺集会に近くになり毎週集うことが叶いました。また私はストレスから解放され心臓病の発作も出ず順調でした。私は休日出勤もなくなり毎週、土・日曜日を自宅で暇を持て余す時間が増えていました。

ある日曜日、家内は礼拝から帰るなり話し始めました。山口にいた頃メッセージで来られていた方がこの近くに住んでおられ、私を連れて遊びに来るようお誘いがあったと言います。

私は躊躇しましたが懐かしい思いもあって会うことを了解していました。訪問時のお話しの内容はもっぱら出会った時のこと、仕事の話で終わったと記憶しています。ただ、別れ際にその方の口から「来週から集会に来たらいいじゃないですか」と言われ返事に困ったことが強く印象に残っています。

その後、家内に対する日頃の負い目を感じて、気が進まないままに初めて吉祥寺集会に行くことになりました。今で言う旧会堂は多くの人で溢れ、想像していた教会の静けさはなく、圧倒され、帰ろうと思ったぐらいでした。それでも家内の心情を思って自分の思いを抑えて席に着きました。その時は、来たことに後悔し、メッセージも何一つ残らず、終われば直ぐに帰ろうと用意をしていたのですが、終了後は多くの集会の人たちに囲まれてしまい、思いとは反対に困惑しながらも一緒に食事をしたのを思い出します。

その後は抵抗感も薄れて通う回数も増えましたが、いつも後方席で拝聴していました。また、地方で開催される「喜びの集い」に出向くように導かれました。

まだ自分からすると疑問符が付くような信仰の歩みでありましたが、ベックさんの勧めもあって、洗礼を受けました。二〇〇四年四月十日でした。名古屋で最初に家庭集会に招かれてから約二十年、五十八歳を迎えた御代田の肌寒い春でした。

次の御言葉は洗礼式で集会の方からいただいたものです。

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。（イザヤ　25・1）

洗礼の時には聖書の知識も浅く、この御言葉の意味さえも深く考えられない者でした。

しかし、白髪の目立つこの歳までを振り返り、私の救いを二十年にわたり主は忍耐をもって待って下さったことや、集会の皆様の祈りに支えられて受洗できたと感謝の思いがこみあげてきて、洗礼式が終わり『日々の歌』（集会の賛美歌集）を歌い出す頃にはなぜか涙が出ていました。

あらためて、私と関わってくださった集会の皆様に心より感謝申し上げたいと思いました。またいつも祈っていてくれた家内をはじめ家族に感謝しました。特に家内は私の救いを主と同様に長い期間忍耐強く祈り続け、御言葉を信頼して私を支え続けてくれました。そのことを心から感謝しています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

この御言葉の通りに主は私を見捨てず家族で最後にお救い下さいました。心より感謝しています。これからも「主の十字架を仰ぎ見て」残された人生を主とともに歩みたいと願っています。

家内の召天

家内は胃がんの為、二〇一二年十一月に召され主の恵みによって先に天国へ移り住んでいます。また、その節には多くの集会の皆さんにお祈りと励ましをいただきましたことを心より感謝申し上げます。家内の病気を通して主が下さった恵みと病気の経緯をお話しします。

病気の兆候を家内に告げられたのはその年の二月頃でした。胸のつかえや吐き気などがあり、素人目には逆流性食道炎ではないかと思い、本人はいつものクリニックで受診して薬を飲んでいました。しかし、症状は一向に良くならず再度クリニックで内視鏡検査を受けた結果、胃に潰瘍と腫瘍が発見され組織検査をしたところ癌の可能性があるとのことで市民病院を紹介されて再検査を受けました。四月はじめに再度の内視鏡やCT検査の結果、クリニックでの診断と同様に胃がんを告げられました。

家内から電話口で癌と告げられた時には電話を持つ手、話す口も震えて気が動転し、かすかな希望の祈りが叶わなかったことを思いました。

けれども、「主はこの重荷を支えてくださるお方」との思いも与えられ、素直に聞くことが出来ました。同時にこの現実を「救われた者」の恵みだと思えて心より感謝することが出来ました。

互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。（ガラテヤ　6・2）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

市民病院を訪れると担当医師からこれからの診療方針を聞かされ、はじめに抗癌剤投与で癌を縮小させた上で胃の切除手術を行うが切除部分は出来る限り少なくするとのことでした。そして、手術日までの三週間を自宅で待つ予定でしたが、十日後には食欲が極端に衰え、自宅での介護は無理だと私の判断で、担当医師に願い出て入院をさせました。

その後、抗癌剤投与による治療はあきらめ、切除手術を優先する旨を告げられました。手術日には多忙の中、集会の祈り会の皆さんが病院まで来て祈って下さいました。本当に感謝でした。私たち家族も予定時間に遅れはしましたが心静かに待つことが出来ました。

しかし、当初は胃の三分の一を残すとの説明でしたが結果は全摘出となってしまいました。一週間後には退院し帰宅できたことに喜びがありました。そして次の抗癌剤治療に備えました。五月には抗癌剤治療のため再度の入院、投薬中は嘔吐と下痢が激しく、後二回予定の抗癌剤治療は可能なのか不安を感じていました。一回目の治療後退院したのですが、手術前と同様に食事も進まず見る間に痩せていくのが痛々しく、周りの

私たちも限界を感じながらの再入院でした。

入院中に再手術で食道と腸の直結した部分をステントで拡大したのですが、ほとんど点滴に頼る状態でした。次の治療はやめたいと本人が強く言いますので子供たちと相談の上で担当医師に今後の抗癌剤治療は体力の限界と思えるので停止してほしいとお願いしました。医師からは転移・再発の覚悟を確認されてしまいました。その後の治療は通院による漢方薬等の体には優しい治療に変わりました。

本人は入院と通院を繰り返し辛いことが多かったと思うのですが気持ちを落とすことはありませんでした。時間と体調が良ければ病室や看護師の皆様に集会発行の書物をお渡しするなど主を伝えることができ、主に用いられていることを喜んでいました。

また、本人の口から「病気の回復は不可能かも知れない。症状がどう変わるかわからないけれども主だけがご存知であり主の御言葉と御旨に従いたい」と度々聞いたのを覚えています。

主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。

（ヘブル　2・18）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

しかし、回復の希望とは反対にその後、入退院を四回繰り返しました。症状は肺に水が溜まり、酸素吸入をしなければならない状況になっていました。担当医師からは現状は対処療法になっていること、抗癌剤治療を停止したので今後は予想がつかないこと、ただ、ご本人が望まれている帰宅を実現するためリハビリ治療に全力で取組み帰宅できるように対処したいと伝えられました。

しかしながらリハビリはままならず、車椅子での帰宅になりました。けれども本人には喜びがありました。その後は訪問医師と看護師の助けを借りながらの自宅療養となりました。症状は相も変わらず食事は細く下痢も度々起こしていました。それでも顔を見ながらの看護はやすらぎの時間もあって平安を感じる日々でした。十一月には次男家族も駆けつけてくれて、孫たちに囲まれた誕生日を祝うことができ感謝でした。

その後は医師の緊急呼び出しも増えて病状が安定しない気分がすぐれない日々が続きました。「伝えて欲しいこと」があればとメモ用紙を家内のベッド横に置きましたところ翌日、小学生が書くようなたどたどしい字で書いたメモを渡してくれました。

「すべてが最善でした　救われた時、日々のうたでは　なかったけれど、中は一緒　召されるまで変わらない　ゆるぎない確信でした。

みなさまにお伝えして　ローマ書3・23～30

神は唯一ならばそうです。

神は唯一ですべてのすべてです。」　万里子　終

このメモが最後の証しとなり三日後の十一月二十二日早朝にイエス様は御国へと引き上げて下さいました。

その後、主の栄光を感じながら葬儀、お別れ会を催すことが出来ました。さらに未信者の親族、友人に福音が伝えられたこと、また、多くの方々のお祈りが私たち家族の支えになったことを知ることができ、主に心から感謝しました。

私にとって、なによりも身近な信仰の灯が消えたように思います。けれども家内が遺してくれたことば「神は唯一ですべてのすべてです」を心に刻み、これからも家族ともども、主を仰ぎ見ながら御国を目指して

6人の証し

Unser HERR lebt

歩みたいと思っています。

鳥取県南部町への移住

聖書における移住例は、創世記にアブラム（後にアブラハム）が主の啓示によって見知らぬカナンの地を目指して苦難の旅に出かける光景が記されています。そのアブラムの移住と比較すべきことはないのですが、私の移住のお話しを短くお話ししたいと思います。

最初に移住の思いが起こされたお話をします。

ある地方の「喜びの集い」でのお交わりの時、山陰集会の方から集会が現在は閉鎖されている実情を切々と訴えられました。私も山陰の出身者として翌日、その方と共にベックさんに話を聞いていただきました。ベックさんはメモを取りながら聞いて下さいました。しばらくして、いつしか忘れていた私は当番表に「山陰集会」の欄があると知り、驚きとともに願いが叶い、思わず主の御業を讃えました。再開後の最初を記念する集会は山陰に相応しく雪が降る倉吉市で、地元の兄弟姉妹と山陰出身の兄弟姉妹五人で開かれました。

その後、山陰集会のメッセージ当番の方とお会いする度に山陰集会の話題になっていました。その頃の私は家内を御国に送り、身軽になっていたというわけでもないのですが、会話の中で「私が移住して礼拝場所を作る」ことになっていました。

それからは、話した手前いつも移住を意識しながらの生活になって行きました。しかし、いざ現状を変えるとなるとハードルも高く、考え直しを勧める声も多く、決断できないまま移住の年齢限界と思っていた七十歳が迫り、具体化の為に動き始めました。移住に先立つ課題の整理にとりかかり、資金のこと、移住場所、住居探し等、数々の課題がありました。まず祈りの日々の中で、朝からインターネットによる「家探し」と「現住居の売却」の難課題から始めました。しかし、その難題も次々と解決していき、主は憐み深く恵み豊かな方であることを実感させて下さいました。

現在の鳥取集会は六名です。小さな小さな群れではありますが『日々の歌』二一二番の歌詞にありますように主の御手で与えられた集会と思っています。これからも主の豊かな御恵みを感謝して集うことが出来ますよう、集会の皆様のお祈りに加えていただければ幸いに思います。

原 八朗（はら はちろう）
一九四七年 島根県生まれ、一九六五年 松江工業高校電機通信科卒、一九六五年 富士通株式会社入社、二〇〇九年 定年退職

妻 万里子（二〇一二年十一月二十二日 召天）
長男 一成
次男 正大
長女 朋子

世界のうちに選び出され
主に立てられた小さな群れ
主イエスひとりをかしらとして
建てあげられた主のみからだ

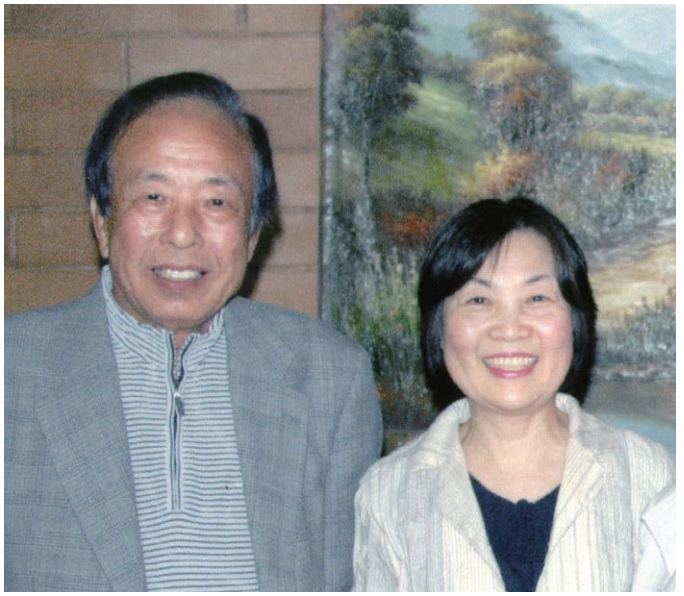
救いの民は一つに群れ
一つの心 一つの御名
一つのからだ 一つの霊
一つの祈り 一つの歌

『日々の歌』より
二一二番「世界のうちに選び出され」一、三番

6人の証し

汝静まりて、われの神たるを知れ

浜田 美鶴



ご主人の勝さんと

生い立ち

私は父、奥村六郎と母、春の間に三男、三女の末っ子として誕生しました。母の養父の兄はハワイのマキキ教会を創立した人で、母は幼いころからイエス様を知っていました。父の仕事のため一家は京都から尼崎に移り住み、度重なる空襲の末に終戦となり、大量の国債は紙くずとなったと聞きました。

そんな中で私は生を受けました。母は産後の高熱で意識朦朧となり、知り合いの看護婦さんの計らいで配給のミルクを受け、私は命をつなぐことができました。

私が三歳の時、父に肝臓がんが見つかり四十六歳で召されました。父の死後、後になって母が、枕の下にはモルヒネの包みがいくつも残されており、子供たちのために父は生きたかったのだと、また、母の心には「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」とのみことばがあったと話してくれました。何もない貧しい家でしたが穏やかな母と三人の兄、二人の姉がおり、明るく幸せな子供時代でした。

バプテスマ

私は近くのキリスト教系の幼稚園に通い、小、中、高と普通に楽しい学校生活を送りましたが、戦争や父の死について聞いており、「世の中が変わっても、人が死んでも変わらない絶対的な永遠というものがあるのだろうか？ 真理とは何？ それがこの世の中にあるのだろうか」との思いが心の隅にありました。

一九六五年秋、就職が決まり、社会に出る不安と、就職し、結婚し、子育てし、老いて死ぬという人生の終わりが見えたような空しさを感じていた時、校門で聖書のことが書かれたチラシを手渡され、教会に行き始めました。始めは罪の意味がわかりませんでしたが、友達と神様はいないと話し合ったことを思い出しました。神を否定することが罪であり、その罪をイエス様が引き受けてくださったと知り、一九六六年兵庫県能勢川にて受洗しました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

その後、会社勤めにも慣れ、引越しもあり教会から離れました。

京都府へ

一九七〇年に結婚し、夫の勤務地、京都府福知山市で七年半暮らしました。二人の男児が与えられ、子育ての苦労の中、教会に行きたいけれど二人の幼い子供を連れては無理と諦めていた時に、「エホバの証人」の方が来られ自宅で聖書の学びを勧められ飛びつきました。何度かの学びで「エホバの証人」が聖霊を神と認め

（ヨハネ　14・6）

この方といれば大丈夫と安心し、毎日聖書を開き家族の救いを祈り始めました。

友人に聖書の話をすると何人もイエス様を信じ驚きました。聖書と祈りに忠実なご夫妻とお交わりもいただき、夫も時々礼拝に参加するようになり、親子揃ってイエス様の前に集う喜びをいただきました。豊かな自然と穏やかな人々に囲まれ毎日楽しく過ごしていました。

滋賀県へ

一九七七年、夫の転勤で夫の故郷、大津市膳所（ぜぜ）に引越すことになりました。私は福知山を離れたくありませんでしたが、次のエレミヤ書のお約束にすがり、不安と期待を持って引越して来ました。

永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。

（エレミヤ　31・3）

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

わたしがあなたがたを引いて行ったその町の繁栄を求め、そのために主に祈れ。そこの繁栄は、あなたがたの繁栄になるのだから。（エレミヤ　29・7）

夫の父が用意してくれた家に住みましたが、親族から先祖を大切にせず仏壇に手も合わせない嫁に先祖の残したものを与えるのはおかしいとクレームが出ました。義父は気にしなくて良いと言いましたが、私は夫に申し訳ない思いでいっぱいのなか、「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」（マタイ19・29）のみことばをいただき、夫は人

それぞれの歴史と立場があると言って受けとめ、後に市内の山間部、国分（こくぶ）町に移り住むことになりました。

新しい教会では私はできる奉仕に励みましたが、夫は間もなく、息子たちも高校生になって教会から離れていきました。教会では嵐が吹き荒れており、私の中も嵐が吹き、喜びも平安も跡形（あとかた）もなく消えていきました。「神様は間違うはずのないお方。では何がどう間違っているのか教えてください」。「イエス様のおられるところに行きたい、エレミヤ書の約束はどこにあるのですか」と叫んでいました。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。

（詩篇　121・1～2）

キリスト集会へ

国分町に引越した翌年一九九五年六月、気持ちも限界に達し、もうだめだと感じた翌日、キリスト集会の証し集『光よあれ（第7集）』を石川県に住む姉妹が送ってくださったのが届き、引き込まれるように読みました。巻末のメッセージには「イエス様はわたしのところに来なさいとあなたを呼んでおられます」とありました。手紙に書かれてあった姉妹のお宅を訪ね、たくさんのメッセージテープを貸していただきひたすら聞きました。「自分の働きを止めイエス様の足元に静まり、みことばに聞き入りなさい」と語られていました。

イエス様よりも人が組織した教会と人の働きを重視していた私の間違いが分りました。

あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。

（ガラテヤ　3・3）

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。彼らの目の前には、神に対する恐れがない。

（ローマ　3・10〜18）

以前はだれか他の人の事と思っていましたが、一つ一つのことばが私の事として心を刺し通しました。「私は救われた。聖書を読んでいるし祈っているから私は正しい」と神を畏れず、自分の正義を振り回し、神様のためと言いながら実は自己満足のために動いていたこと。息子たちには神様の愛と恵みより律法を押し付けてきたこと。数えればきりのないほどの悪。私の中には良いものは何もないことを見せていただきました。自分のことを、十字架の下でマリヤたちと共に泣いている人だと思っていましたが、実は群衆の中で十字架につけろと叫ぶ者なのだと気づかされました。間違っていたのは私でした。

あなたがたの着物ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなた方の神、主に立ち返れ。

（ヨエル　2・13）

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

（ヨブ　42・5〜6）

嵐は静まり喜びと平安に満たされました。葛藤の末、教会を退会しました。

大津市膳所に越してから国分町でキリスト集会に導かれるまでの十八年間は、本当の平安と喜びをくださるためのレッスンの年月でした。

いなご、ばった、食い荒らすいなご、かみつくいなご、わたしがあなたがたの間に送った大軍勢が、食い尽くした年々を、わたしはあなたがたに償おう。あなたがたは飽きるほど食べて満足し、あなたがたに不思議なことをしてくださったあなたがたの神、主の名をほめたたえよう。

（ヨエル　2・25〜26）

エレミヤ書29章11節の約束は本当でした。

しばらくすると、どうしても赦せない人のことを示され、この思いに死ななければならないともがきました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生

6人の証し

Unser HERR lebt

きておられるのです。（ガラテヤ　2・20）

「私はもう死んでいて、私の代わりにイエス様が生きてくださる。だから私の思いを引きずって生きる責任はない」と示され、赦せない思いが霧のように消えて、心の中を心地よい風が吹き抜けていきました。

また、「～であらねばならない、～すべき」、つまり聖書の教えを自分の力で実行しなければならないという考えに長い間縛られていましたが、メッセージやご兄姉とのお交わりを通して、「私にはできません。でも、イエス様はどんなことでもおできになります」。「私は間違います。でも、イエス様は間違うことのないお方です」というふうに少しずつ解放されて心が軽くなりました。

イエス様を求めたのは私自身だと思っていましたが、本当はイエス様の方が私にオーダーメードの環境を用意してくださり、求める心を与えてくださったこと、今に至るまで多くの方々に祈られ支えられてきたことを心から感謝します。

家族の事

夫は二〇〇〇年に退職後、集会に導かれ芦屋集会や国内海外の喜びの集いでベックさんはじめ兄弟方とお交わりをいただき、二〇〇一年御代田で受洗。二人の息子たちも駆け付けてくれ喜びました。

その夫に二〇一六年十一月、自覚症状が全くないまま、泌尿器科の検査で七センチ大の腹部大動脈瘤が見つかり即入院。手術前の精密検査で心臓冠動脈が一本完全に詰まっており、残り二本の動脈から毛細血管が伸びて何とか生きて来られたと告げられました。米国と国内で心臓手術二千例を手がけた医大トップのドクターのチームにより、胸骨も切らず心臓も止めず、バイパス手術と腹部の大動脈を人工血管に換える手術を十一時間かけて受けました。後でそのドクターのこ

とを知って驚き、その上、手術の傷は全く痛まず、術後十一日で退院できました。

二〇一九年九月、記憶に変調を覚え、近くの開業医院に行くと、そこの医師がたまたま脳神経内科の専門であり、検査の結果、硬膜下血腫と診断され済生会病院に緊急入院。翌朝一番に手術、三日で退院しました。

二〇二一年二月、心臓血管外科の定期健診でのCTから腎臓がんをステージ1で見つけていただき手術を受けました。

その度に兄姉方のみことばと祈りとお交わりをいただき、後遺症もなく回復させていただいています。

結婚以来夫は健康も、仕事もその他もろもろ順調なラッキーボーイぶりでした。それまでは、先に救われた私への主の恵みが夫に及んでいると思っていましたが、そうではなく、イエス様は夫を生まれる前から捉えてくださっており、その恵みが私にも与えられていたことに気付かされました。

夫の父は私の信仰を暖かく見守ってくれており、一九九四年九十歳で召されたのですがその前日、罪の赦しと感謝の祈りをしますと、一言一言にうなずき「おおきに」と答えてくれました。

母は私の勧めで近くの教会に導かれ、聖書の学びを通して七十歳を過ぎてから、自分の罪のためにイエス様が十字架で死んでくださったと涙を流しました。また戦時中、周りの社宅が全部空襲で焼かれたのに、我が家だけが無傷だったのはイエス様が守ってくださっていたのだと感謝し、一九八九年八十五歳で御国に凱旋しました。

次姉は色々な問題を通して教会に導かれ、夫婦揃って受洗しました。義兄は四十二歳で白血病を発症し、十六年後に肝臓がんを発症。入退院を繰り返す中、姉と私がみことばを読み、賛美した後、二〇〇四年六十一歳で御国に召されました。最後の入院の時、姉は義兄に優しくできず、愛のない者だったと悲しみま

6人の証し

したので、姉を家庭集会や「喜びの集い」に誘いました。そこでベックさんやご兄姉とお交わりをいただいて、姉の心に聖書が深く深く染み入り、慰めをいただいたようです。今はイエス様の恵みに感謝し涙する日々を過ごしています。

長兄は私には父親のような存在でした。学生時代に受洗しましたが長年教会から離れていました。二〇〇九年秋に電話があり、体力も気力も弱ってきたと言うので「天国で会いたいね」と言うと、「僕は罪をたくさん犯してきたから天国には行けない」との兄の返事に驚かされました。その三日後脳出血により、半身麻痺と言語障害になりました。お見舞いに行き「聖書を読んでお祈りしてもいい?」と聞くと大きく頷きますので、兄の罪は赦され、永遠のいのちが与えられていることを感謝しました。翌日には、市川集会の滝兄弟が来られてお祈りしてくださいました。言語障害のため義姉にはうまく伝わらないので、兄は主治医に葬儀はキリスト教でして欲しいと言い残しておりました。市川キリスト集会でお葬儀をしていただき多くの方に福音を聞いていただきました。二〇一〇年七十九歳でした。

長姉は生涯を通して数々の病と試練を与えられ、結婚しましたが子に恵まれず、身も心も痛んでいました。そんな長姉を母と共に教会に誘うと、イエス様の愛に触れることができて喜ぶようになり、五十一歳で受洗。紆余曲折はありましたが、神様より自分を上に置く傲慢を悔い改め、夫の救いを祈りつつ二〇一三年八十歳で天に召されました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。
（詩篇　119・71）

二〇二〇年二月末、夫の長兄（八十八歳）に末期がんが見つかり入院。元気な時、「人は死んだら終わり」と言っていましたが、夫とお見舞いに行き「お祈りしてもいいですか?」と聞くと、嬉しそうに「祈ってくれるの?」との返事に驚き、「イエス様にすべてをおまかせしますのでよろしくお願いします」と祈ると両手を合わせて「ありがとう」と言ってくれました。穏やかな顔で義兄が召された日、病院からの帰り道、琵琶湖に大きな虹がくっきりと架かり、イエス様が義兄のたましいを抱きとめてくださったと感謝しました。

ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る。
（伝道者　12・7）

残された義姉は、訪ねると一緒に聖書を暗唱し、賛美歌を歌い、祈ることを喜んでいます。

同年七月、前述の長姉の夫（九十五歳）が入院。長姉の存命中は信仰生活と日常生活を助けてくれていました。次姉とお見舞いに行き「祈ってもいいですか」と聞くと子供のように澄んだ目で「祈ってくれるの?」との返事にまたまた驚き。次姉の祈りに両手を合わせて「ありがとう」と言ってまもなく召されました。

二〇二〇年二月末はコロナ蔓延の直前、七月は二回の緊急事態宣言の狭間でしたが、各病院は見舞客を受け入れてくださり、行く度に義兄たちと祈る時を備えてくださった主に感謝します。

イエス様のみこころより自分の思いが先走り、失敗を繰り返すばかりの者ですが、イエス様が来てくださるまで家族の救いの約束を感謝してお待ちしたいと願っています。

私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。
（2テモテ　2・13）

6人の証し

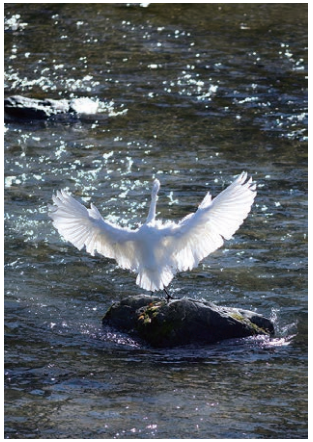
Unser HERR lebt

わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。
（イザヤ　45・7）

来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。（詩篇　95・6）

浜田 美鶴（はまだ みつる）
一九四七年四月三日生まれ、兵庫県立尼崎北高等学校卒、伊藤忠商事（株）、滋賀県草津市在住

夫　勝（まさる）
長男　哲夫（てつお）、妻　友貴枝（ゆきえ）、長女　真歩（まほ）、長男　亘紀（こうき）
次男　康夫（やすお）、妻　美穂（みほ）、長女　彩乃（あやの）、次女　玲那（れな）



主は呼び続けておられた

梅野和美



お琴を演奏される和美さん

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
（詩篇　23・1～2）

私は芦屋キリスト集会に集わせていただいている梅野和美と申します。イエス様の御助けをいただきながら、これまでの自分を振り返って見たいと思います。

幼い頃のこと

私は一九四五年七月六日に大橋家の長女としてこの世に生を受けました。生まれた時は目も正常だったようですが、空襲の中を祖父が私を連れて山に逃げた時に、蚊に刺された事が原因とか、銭湯（せんとう）でばい菌が目に入ったのが原因とか、失明について母はいろんな理由を教えてくれました。ちゃんとした病院で検査を受ける事などその頃はできなかったのでしょう。

六歳になった私は父親の兄弟の強い勧めで大阪の

府立盲学校に入れられました。まだ何にもわからない幼い子どもが親元から遠く離れた所に追いやられたという感じです。恥ずかしい話ですが、それまでは服も自分で着ることができず、母に着せてもらっていましたから大変です。みんなよりも行動が遅く辛い毎日でした。

上級生のお兄さんお姉さんが遊んではくれましたが、帰りたいという思いは募るばかりでした。しかし突然麻疹(はしか)という病気が与えられた私は、幸いにもそれを機に淡路島の実家に帰ってくることができました。

もう二度と親元を離れたくないと思っていた私でしたが、その後どういうわけか訪ねて来られた淡路盲学校の先生との出会いで、再び盲学校の幼稚部に入園することになりました。淡路盲学校のある洲本まで私の家からはバスで一時間半ほどかかり、さらにそこから徒歩で四十分ぐらいの所に盲学校はあったので、目の見えない私には通園などということは困難で寄宿舎に入りました。

寄宿舎に幼稚部から入った子どもは私が初めてで、上級生や寮母の先生方が大事にしてくださり、大阪での生活とは一変したものになりました。親元を離れた生活も、さほど辛さやさみしさも感じずに時は過ぎて行きました。

イエス様との初めての出会い

私がイエス様のことを初めて知ったのは、確かまだ小学生で幼かった頃だと思います。

母の知り合いで、「よしえさん」という名前の方だったと思いますが、その方が日曜学校に連れて行ってくれ、『主われを愛す』の賛美をしたことを今でもはっきりと覚えています。子ども心になじみやすいいい歌だと思いました。彼女がクリスチャンであったかどうかはわかりません。

一九六一年高校生になった私は鍼灸マッサージの勉強をするために神戸市垂水区滝の茶屋にある兵庫県立盲学校に入学しました。

高校二年の頃だったでしょうか。その頃東垂水のルーテル教会に通っておられた先輩たちに誘われて、礼拝に集うことになりました。毎週三人の教会の姉妹方が私たちの送迎をしてくださいました。家族的な小さな教会で、牧師先生をはじめ多くの兄弟姉妹方も親切にしてくださり恵みの時でした。鍼灸マッサージの資格を取るためには五年を要し、それから国家試験を受けなければなりません。その卒業の年に受洗をさせていただくことができました。

神様がくださった不思議な出会い

ちょうど卒業の年でした。三重県の盲学校を卒業されて神戸市灘区青谷の聖書学院に入学され、そこから私たちの教会に集っておられた一人の女性との出会いがありました。私と名前が一字しか違わない大橋和江さんとの出会いでした。現在彼女は名古屋集会に集っておられて、ご存じの方もおられると思います。彼女との出会いは、まさしくイエス様が引き寄せてくださった以外の何ものでもないと思います。今は二人とも姓が変わっていますが、親しいお付き合いを続けています。

職場でのこと

無事資格を取ることができ、卒業後半年ほどして私が就職したのは西宮にある「盲人ホーム」という女性ばかりの職場でした。学校から詳しい説明も受けず、とにかく面接に行ってみようと思ったそこは、なんとクリスチャンのホームだったのです。創立者ももちろん女性でした。不思議なことにそこで働いておられたのが学生時代に出会った大橋和江さんでした。名前がよく似ているという事で彼女は甲東寮、私は北口寮に配属されました。

ここでは毎日朝食前の賛美、聖書朗読、お祈りするのが日課でクリスチャンとしての生活をしていました。生活にも慣れて一年ほどたった時のことです。仕事は毎日夜の十時頃終わるので、姉妹三人で就寝前の祈り会をすることになりました。ホームは三階建てで一階は仕事場、二階は宿舎、三階はピアノのお稽古や、月に一度、二つの寮合同の集会に使われていました。そんなわけで夜は三階を自由に使うことができたのです。

ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。（マタイ　18・20）

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

その後の罪深い生活の日々

そんな恵まれた生活を送らせていただいていた私でしたが、この職場を離れたとたんに、私は放蕩娘になって、神様のことなど忘れてしまったかのように自由で気ままな生活を何十年もの間送り続けてしまいました。

一度故郷の淡路島に帰った私でしたが一九七三年結婚し、新たに西宮での生活が始まりました。

主人に私が以前教会に通っていたこと、洗礼を受けていることを話した時、主人から「そんな人と結婚など決めるのではなかった」と言われました。これがその後の不幸の始まりだったかもしれません。彼は神様などこの世にはいない、頼れるのは自分だけというような気の毒な考えの持ち主だったのです。

一九七八年、長男正明が与えられました。彼がお腹の中にいた時、主人に連れられて何かを探していたのでしょうか、暗い道を歩いていて、突然一メートルぐらいの高さから転落しました。幸いにも落ちた所は草はらでお腹の子どもにはなんの影響もありませんでした。感謝でした。一九八〇年には長女優子が与えられました。

ある日、ベーチェット病という難病に侵され入院していた主人を見舞った帰りのことでした。バスから下車する際に、子どもを二人連れていたら一人分の料金が発生することを知らなかった私が運転手から注意を受け、子どもたちを先におろし自分もバスから降りようと地面に足をつけた途端、突然バスのドアが閉まり私のスカートを挟んだままバスが走り出したのです。とっさのことで私もバスについて一緒に走り出しました。後ろから泣きながら追いかけてくる子どもたちの叫び声が聞こえてきます。信号が赤に変わった所でドアは開かれました。五十メートルぐらいは走ったと思われます。もうだめかと思いました。しかし、不思議な事にかすり傷ひとつも無くただスカートが汚れただけでした。後でレントゲンを撮りましたが異常はありませんでした。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

神様から離れて生活していた私に、神様は何度も「来なさい」と声をかけてくださっていたのです。

長男も助けられた体験があります。彼が小学一年の頃でした。歩道橋を渡らずに道を歩いていた時、車に引かれそうになったようです。幸いにも車を運転されていた女性がスピードを緩めてくれたので良かったのですが、一歩間違えばどうなっていたかわかりません。彼も何事もなくすみました。

「何度も何度も助けてあげているのにまだあなたはわからないのか」と、神様は言っておられたと思います。イエス様の一方的な憐れみとしか言いようがあり

ねて来てくださり、家庭集会を持ってくださいました。何十年かぶりで、再び主のもとに導いていただけたのです。

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

（コロサイ　1・13）

その年だったと思います。芦屋キリスト集会の皆さんとの交流が始まったのも。限られたヘルパー利用時間の関係もあって、月に一度しか礼拝には参加できませんが、同行してくださっている吉川さんに感謝です。そしてなによりもその時間を与えてくださっているイエス様ありがとうございます。

コロナは悪い事ばかりではありません。インターネットでのＺＯＯＭ(ズーム)を通して、祈り会、家庭集会、礼拝に参加できるようになり、神様から恵みをいただいていることは幸せです。

母の救い

母の救いがありました。その三年ほど前から六月と十二月に母の入所している栄光園というホームに近江八幡集会の皆さんと訪ねるようになりました。

母は、別の宗教を持っていたので、私は母が変なことを口にして集会の皆さんに嫌な思いをさせるのでは、と心配で、正直、前の夜は気がかりでなかなか眠れないぐらいでした。でもイエス様はちゃんと母を捕えてくださいました。

「和美ちゃんが信じる神様を私も信じます。イエス様感謝します」と皆さんの前で言ってくれたのです。

長い間、私に「ごめんね。ごめんね」と言って良心の咎(とが)めに苦しんでいた母でしたが、重荷をすべてイエス様におろすことができて、私は感謝で一杯になりました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。…神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・1、11）

その後、ほとんど話しもできなくなった母とは、私が芦屋キリスト集会で証しをさせていただいた日の朝、大阪から来てくれた長男の正明と一緒に行った面会が最後となりました。その二週間後、二〇二〇年十二月二十六日に九十七歳で天に召されました。

受洗にはいたりませんでしたが、神様はきっと母を守っていてくださることでしょう。そして地上では苦労の多かった母ですが、きっと天国で楽しく過ごしていることでしょう。そして私にはまだ救われていない二人の子どもがいます。梅野正明と花畑優子の救いをお祈りいただければ幸いです。

最後に私の好きなみことばをもってお証しを終わらせていただきます。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

（ローマ　7・24～25）

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・1～2）

その後、結局主人とは別れて淡路島に帰って来ました。

近江八幡キリスト集会の兄弟姉妹との出会い

二〇一五年、友達の知り合いのクリスチャンの紹介で、近江八幡キリスト集会の兄弟姉妹方が私の家を訪

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

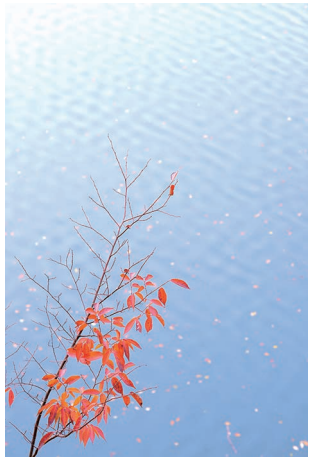
（1テサロニケ　5・16〜18）

梅野 和美（うめの かずみ）

一九四五年、兵庫県津名郡岩屋町（現在の淡路市）生まれ、淡路盲学校小学部、兵庫県立盲学校高等部卒業、西宮の盲人ホームに就職、一九八五年に淡路島に帰郷し現在に至る

長男　梅野 正明（うめの まさあき）
長女　花畑 優子（はなはた ゆうこ）
三人の孫

※梅野さんは盲学校にてパソコンで文字入力を習われ、ご自分でこの証しをお作りになり、また漢字の箇所を集会の方が見直してくださいました。（編集者より）



主の恵みは、私に十分です

犬塚 大資



大資さん（一番後右）と集会の皆さん

私は昭和三十四年、神奈川県に生まれ、二十七歳で結婚するまで、実家で暮らしておりました。下に弟と妹がひとりずつおります。

幼少の頃、小児喘息（しょうにぜんそく）を発症し、中学卒業頃までは虚弱体質と言われてきましたが、高校に入学するころには体力も充実し、運動にもこころがけました。しかし、高校三年生の後半、「引きこもり」の状況に突如陥り、学校へほとんど行けなくなりました。この状況は、表面上「自分の力」によって克服できたように思われましたが、自分の心の中には大きな闇（やみ）を抱えたままでした。

やみと死の陰に座す者、悩みと鉄のかせとに縛られている者

（詩篇　107・10）

この頃に、イエス様と出会えていたらと、今になって思わされます。

大学に入学すると教養講座で学んだコンピュータ・

ソフトウェアに興味を持ち、一九八三年大学卒業と同時に、日系のＩＴ企業に就職し、企業実務に関わるシステム開発に没頭しました。開発プロジェクトがピークになると連夜終電で帰ることや、会社への泊まり込みなどもしょっちゅうでした。一九八六年に結婚、翌年長男が誕生してからも、残業代が家計の足しになる面もあると言い訳をして、昼も夜も、頭の中は、開発中のシステムのことでいっぱいという、会社人間として過ごしていました。

一九八九年、顧客のヨーロッパ統括会社向けの、業務システム開発プロジェクトに参加し、翌年の一九九〇年一月に、システムの本番稼働作業のため、単身、オランダのアムステルダムに向けて飛び立ちました。その半年後に、家内と、当時三歳半の息子をオランダに呼び寄せ、翌年娘が現地で誕生しました。

初めての海外生活を送る自分にとっても、オランダは大変住みやすく、色々とカルチャーショックを受けながらも、次第に好きになっていきました。

一方、キリスト教が文化の中心となっているヨーロッパに生活しながらも、イエス様については一般知識として知っている程度で、いくつもの教会を訪れながらも、建物や内部の装飾の美しさ、美術品に興味を覚えるのみで、尚、主とは離れたところを歩んでおりました。

隣国ベルギーのゲントの大聖堂にある、有名なファン・エイク兄弟作の祭壇画「神秘の子羊」を見た時も、子羊が胸を刺され血を流している図が、どういう意味かもわからずに、この絵のどこが有難いのかと、不思議に思いました。この子羊がイエス様を表しているとわかったのは、ずっと後になってからのことです。

しかし西洋美術の中には、キリスト教の影響を受けているものが大変多く、自然に、イエス様のイメージは自分の中に形成されてきました。そして、救いを知らぬ私にも、主は布石を打たれていらっしゃいました。

オランダ在住の日本人画家・文筆家として活躍されている、吉屋敬先生（本名「吉屋敬子」先生）が、現地で日本人向けの油絵の講座を開催されていることを知り、興味を持って参加させていただきました。オランダを去ってからも、継続的に連絡を取らせていただいておりましたが、先生がキリスト者であることを知らぬままでした。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。（ヨハネ　13・7）

やがてヨーロッパにおける生活が十年近くに及んだ一九九九年の夏に、一家四人で日本への帰国が決まりました。真夏でも日蔭に入ればクーラーも不要な乾燥・低温のオランダの夏から、日本の湿気の激しい猛暑時への帰還に一家で大変な思いをしました。

それから六年が経過した二〇〇五年、ヨーロッパ子会社社長の肩書で、オランダへの再赴任が決まりました。この年、すでに日本の大学に進学していた長男はひとり日本に残り、家内と娘は後日合流してきました。

さらにその翌年、アメリカ子会社の社長も兼務となり、一家でニューヨークへの移動となりました。これを機に、ほぼ毎月、大西洋をまたいで両国往復の勤務形態となり、少しずつ疲労もたまり始めました。一日の三分の一の時間差をもって、欧米二拠点と日本の親会社の三箇所から、メールで送られてくる各種の課題への対応に、週末までも忙殺され、何とか業務を回していくことのみに精一杯となり、仕事の意義も人生を深く考える余裕もなくなり、時間のみが急速に過ぎ去っていきました。この時に、以下の御言葉に出会っていたらその後の人生が変わっていたかもしれません。

六日間は仕事をしてもよい。しかし七日目は全き休みの安息、聖なる会合の日である。あなたがたは、いっさ

6人の証し

いの仕事をしてはならない。この日はあなたがたがどこに住んでいても主の安息日である。（レビ　23・3）

一方で、たまたまの好業績に恵まれ、本社の取締役にも抜擢されることになったことで、自分の中に高ぶりが生まれ、主との距離はさらに遠のいていきました。

しかし会社の業績はいつまでも好調なわけではありません。欧米それぞれで、自分の手の届かないところで発生してきた原因により、会社の業績が下降し始め、本社経営層は、手のひらを返したように、すべての責任を私に押し付けてきました。主を知らなかった私は、自分の力で解決しようと必死になり、夜も眠れなくなり、本社からの電話の音に怯え、メールにも恐怖し、自信を完全に喪失して、ついには鬱状況に陥りました。ニューヨークで独自の治療方法を行っている日本人の精神科医に通い、少しずつ快方に向かいましたが、会社の状況はますます厳しさを増し、本社側からは無理な数字を突き付けられたうえ、厳しい叱責以外に何も実質的なヘルプの無い状況では、自分の状況は改善しないことを認識しました。また、海外だけでなく日本国内の各支社支店にまでも、数字ばかりを追い求めて社員を全く大切にしなくなった本社経営層に対して、株主総会で強い抗議を行ったうえで、会社を退職する決心をしました。

こうして二〇一四年六月に、三十年間務めた会社を辞めて日本に帰国しましたが、これまで会社人間として過ごしてきてしまった自分には、支えとなるものが消滅していました。また鬱は完治しておらず、一時は、電車の来るホームから飛び降りたくなる衝動を必死に抑えながら、次の就職先を探したのですが、既に五十代半ばとなっていた自分を採用してくれる会社はなかなか見つかりませんでした。

一年後に、知人の紹介で、日本に市場を求める外資系ＩＴ企業の、日本支店マネージャーの職を得て、市場開拓に専心しましたが、短期間に本国の社長が二度交替し、日本市場に対する営業方針が急激に強硬なものに変化したため、私は不要と判断されたようで、攻撃の的となり、多くのトラブルを経験しました。

明示的な退職勧告はないかわりに、あらゆる種類の明示的ではない攻撃、インターネットを通じてのハッキングや監視。また疎外、無視。昨日までの親しい同僚からの激しい攻撃の電話。私からのメールへの無反応、または冷たい返答。巧妙に行われる自己批判への誘導。常に見られている、聞かれているという恐怖感。さらに偶然とは思われないいくつかの事象が重なり、彼らには物理的な現象を起こさせる力まであるのかと、著しい恐怖感を呼び起こされました。

自分でも妄想なのではと疑いながらも、その現実性を否定するよすがのないままに、強烈に感じる恐怖感。このような状況が暫く続いた後、手が震えだし、パニック状況で呼吸ができなくなり、夜も眠れなくなりました。

ついには布団から起きだすこともできないようになり、家内が、近所の心療内科に連れて行ってくれて、抗鬱剤を数種類処方され、少し落ち着きを得ましたが、これ以上、現状に耐えられず、二〇一七年十月末をもって、この会社を退職するに至りました。

しかし、この恐怖感・不安感は、退職後にも、ふとしたことから、強烈によみがえってきます。手足の震えは収まらず、脳神経科を訪れ、ＭＲＩ等の検査の後、パーキンソン病との診断を受けました。手の震えの他、手足の運動能力の著しい減退、これに伴い、歩行速度の遅さ、バランスの崩しやすさ、字が非常に書きづらい、などの症状があるものの、当初は、日常生活を送る上では大きな障害はありませんでした。

その後、パーキンソン病の専門医のもとに通い始め、薬を処方してもらうと共に、肉体的にも、精神的に

も、活発な状況を保つように言われました。肉体的には、毎日散歩、一日おきに水泳を行うこととし、精神的にも明るい考えを持つよう努めました。

いつも喜んでいなさい。　（1テサロニケ　5・16）

しかし、その後も尚、小さなきっかけごとに急激に不安感が高まり、それが自分の妄想か現実なのか不明確ながら、確実に精神を圧迫する強い恐怖感をどうすることもできずにいたとき、ふと、前述の吉屋敬子先生が日本に一時帰国していることを思い出し、相談しようと思い立ちました。そして、家内と共にご自宅を訪ね、自分の身に起きていることをお話しすると、精神のリラックスのため油絵を再開することを勧められるとともに、彼女がキリスト者であり、吉祥寺キリスト集会に集っていることを教えていただきました。二〇一八年の三月のことでした。

だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。　（ルカ　11・10）

うなじのこわい私は、すぐには行動を起こさなかったものの、集会の皆さんに導かれて、吉祥寺集会の礼拝に参加することとなりました。二〇一八年六月二十四日のことです。その後、再び強烈な恐怖感に襲われたことがありましたが、この時、心の奥底から「イエス様、助けてください！」と家の中で何度も大声で叫び、そして、イエス様は、しっかりと私を受け止めてくださったのです。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。　（伝道者　3・11）

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。　（マタイ　11・28）

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。　（イザヤ　41・10）

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。　（イザヤ　43・1）

その後、「祈り」と「罪」について、ベックさんの著書を紐解きながら、深く考える機会を与えられました。

以前は、主は全能であるならば、ご計画にお任せすればよい、人間が、自分の願いを祈るのは余計なことでは無いかと、祈りの意味を疑問に思っていました。しかし、ベックさんの著書『絶えず祈れ』を読み進むうちに、たとえ主が全能で、常に人間の願いを聞こうとしていても、人間の側が祈らない、または、不純な思いで祈る場合は、主はその手を縛られ、御恵みを与えたくとも、実行することができない、そのために心からの祈りが必要であると学びました。また、祈りはキリスト者にとって呼吸であるとも示され、今、まさに自分にとって、祈りなしに一日を始めることはできず、また、すべてのことを行う前に、その成功を主に祈り、また、感謝するようになりました。

絶えず祈りなさい。　（1テサロニケ　5・17）

そして祈ることにより、主の御心により守られていると感じられる出来事を、大小含め日常生活において経験するようになりました。

世の中で起こる多くの出来事や、好ましくない現状に対して、我々人間が直接改善できることは限られて

6人の証し

います。多くの人は、人間の手の届かない局面に対し、自分の力で何とかしようと焦り、それが不可能であると知るとあきらめて、突然無関心な態度をとってしまいます。しかし、我々は祈ることができます。そして祈りは必ず聞かれ、最善の時に最善の形で実現されることを信じて、祈り続けることができます。

また、救われた当初は、「罪」というものを、自分からは距離を置いて理解していました。確かに、アダムとエバが、神に禁じられた木の実を食べたのだから、その子孫には「罪」がある。しかし、自分も過去に多くの間違いもあるけれど、本当に、「悪」と言われることは何もしていない。自分は「善人」の部類にはいるはずだと頑(かたく)なに考えておりました。

しかし、別のベックさんの著書『神の聖なる戒め』において、神が与えられた「モーセの十戒」に代表される戒律(かいりつ)を完全に守り切ることは、人間には不可能であり、それゆえ人間の罪を洗い出すフィルターとなっていることを学び、あるとき、夜中に目が覚めて、自分の犯してきた「罪」についてはっきりと気づきました。自分が本当は罪人(つみびと)であったことを、心の奥底から理解しました。自分は、過去、自分が良い立場を保つために、意識はしていなかったものの、人を踏みつけにしたようなこともありました。この世で生き残るということは、そうせざるを得ないこともあると思っていたからです。

ある日、深夜に起き上って、主に自分の罪を告白し、赦(ゆる)しを求めました。自分を見つめ、自分の罪を自分で認めるということは、想像以上に恐ろしいことでした。自分が拠(よ)って立っている土台そのものを、自ら根底から揺さぶり、打ち砕くことだからです。イエス様は、罪人である私のために十字架の上で血を流して死んで下さり復活された方、自分の罪を心から告白し悔い改めれば、すべての罪を赦して私を受け入れてくださる方であると知らなければ、とても行うことはできません。

たとい、あなたがたの罪が緋(ひ)のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。（イザヤ　1・18）

そして本当に罪赦されたと実感し、体の中の堅い緊張感がゆるみ、喜びにあふれました。「神との位置を正す」ということを心の奥底から理解しました。

二〇二〇年の三月に、コロナ禍により吉祥寺集会の会堂での集いが中止されると、時を同じくして、パーキンソン病が進行し、体勢のバランスが更に失われやすくなり、また変形性膝(ひざ)関節症の悪化による膝の激痛が恒常化して、歩行が著しく困難な状態となりました。家の中で何度も転んだり、転びかけて何かにつかまってようやく踏みとどまることが何度も続き、ついに外出時には杖に頼るようになり、長距離を移動することが難しく、近所への散歩程度となりました。

吉祥寺キリスト集会が六月に再開されましたが集うことができず、精神的にも鬱状態がぶりかえして強烈な恐怖感に襲われ、親しい集会の方々と長時間の電話でのお交わりをいただき支えられました。一方で、インターネットを通じた、礼拝や祈り会などで集会の皆さんと集う機会を与えられたことは、大きな恵みでした。集会の皆さんの背後にいらっしゃる主のご愛により、徐々に自分の中で平安が生まれてきました。

しかし、日によっては膝の痛みが耐え難く、少し前までと比べて行動範囲がはるかに狭まってしまったことが悔しく、精神的に低迷し、この病は自分の罪から来ているものかと思い悩む日も続きました。

ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。
（1ペテロ　4・19）

6人の証し

主に祈りながら、集会の方々との交わりを通して、少しずつ「病を与えられたのは、主に用いられるための試練であり訓練でもある」と悟ることができました。

それればかりではなく、患難（かんなん）さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。（ローマ　5・3〜4）

そして、集会の皆さんの力を借りて、コロナ禍に関する二回目の緊急事態宣言の解除に伴い、再開された二〇二一年四月四日に吉祥寺の集会所の床に立つことができました。この日は、イースター（復活祭）であり、主のよみがえりに合わせて、自分も復活のための第一歩を踏み出すことができたと、胸の中は感激でいっぱいでした。次のみことばが与えられ、礼拝で集会の兄弟方が自発的に立って祈られるように、私も祈ることができました。主に心から感謝をおささげ致します。

あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。あなたは私の神、私はあなたをあがめます。主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。（詩篇　118・28〜29）

犬塚 大資（いぬづか だいすけ）
一九五九年　神奈川県生まれ、早稲田大学第一文学部卒、（株）ＳＲＡ、他一社
妻　靖子（やすこ）
長男　裕貴（ゆうき）
長女　ひかる

主のご計画だけが成る

砂川 夫佐子



ベックさん、ご家族と夫佐子さん(左から２番目)

救われるまで

私は一九六三年六月、東京都中野区に、父、母、兄二人の五人家族の末っ子として生まれました。身近にクリスチャンはいませんでした。イエス・キリストは歴史上の偉い人、聖書はキリスト教の教典のようなものだと思っていました。また自分自身をいい人間であり、誰々よりはましな人間だなどと思う高慢な者でした。

二十一歳で結婚し、三人の子供にも恵まれて、幸せなはずでした。

でも、救われる直前の私は、身も心もボロボロでした。それまで私は家族のために頑張って、我慢して、一生懸命にやってきたつもりでした。それなのに現実は何もかも行き詰まっていました。思い通りにならない子育て、夫と言えば私の目からは自由気ままにしか見えず、経済的にもかなり厳しい状態でした。その上、数年前から家の立ち退きを迫られていて、翌年の三月ま

でには出ていかなくてはなりませんでした。

心配で心配で仕方がなく、何とかしなくてはと、一人で頑張ろうとしていました。でも、考えれば考えるほど不安でどうしようもなく、うつ状態になり、救われる二年半ほど前から精神神経科に通い、抗うつ剤、精神安定剤、睡眠剤、と毎日薬を飲んでいました。薬がないと眠れず、薬にしがみついていました。好きで、尊敬していて結婚したはずの夫なのに、夫婦関係も最悪でした。「楽になりたい、逃げ出したい。でもそんなことはできるわけがない」と絶望的な思いでした。

彼らは荒野や荒地をさまよい、住むべき町へ行く道を見つけなかった。飢えと渇きに彼らのたましいは衰え果てた。（詩篇　107・4〜5）

そのような時、長男の友人のお母さんを通して、キリスト集会に導かれました。集会の本や福音メッセージのテープをいただき、毎日聴いていました。

一九九一年九月末に初めて家庭集会に行きました。集った日から、「思い煩うな」という声がふっと浮かびます。私は素直に、そう言うのなら、思い煩わないようにしようと思いました。何度も何度もそんなことを繰り返すうちに、いつの間にか思い煩うことがなくなっていました。初めて集会に行ってから二週間ほどたった頃に、ベック宣教師とお話しする機会が与えられました。その後というもの、私はただただ嬉しくて、そのまま家に帰り、子供たちにベックさんの話を伝えたいと思うようになりました。でも、私が自分の口を通して話しても、伝わらないのです。話しながら、何だか変だなと感じ始めたところ、突然、伝わらないのは当然だ、今まで十年以上神様を知らないで、神様抜きで子供たちを育ててきたのだからと思い当たりました。私は自分の思いだけで子育てしてきたことを申し訳ないと心から思い、「ごめんね」と涙、涙で謝りました。

その晩、寝ようと思った時に、何だか薬がいらない様な気がして、飲まないで寝たら、寝られました。

私は礼拝と学び会に一度ずつ参加しただけで、聖書もほとんど読んでいませんでした。また私は何の努力もしていません。ただ主の憐れみによってイエス様を信じ、救われたのです。私は集会に集うことが嬉しくて、主人のことも、子供たちのことも、家のことも、お金のことも、思い煩いを忘れてしまいました。

別人のような私に

集会に集い続けているうちに、以前は自分だけが苦しくて大変だと思っていましたが、いつしか心に余裕が生まれ、主人も主人なりに大変だったのかなと思えてきました。しかし、主人との関係はピリピリした以前のままの状態でした。それなのに、私の方から普段の何気ない会話や、子供の様子など話が出来るようになりました。また主人の硬い表情や反応も、全然気にならなくなりました。以前の私では考えられないことです。誰かに言われたのでもなく、こうした方がいいとか考えることもなく、ごく自然にやっていました。

その年の暮れに、主人と二人だけで話し合う時が与えられ、和解することができました。主人は「夫佐子は集会に行くようになってから優しくなったね」と言ってくれました。年が明けてから、二人で不動産屋を回りましたが、いくら探しても適当な住まいが見つかりませんでした。バブル崩壊の後で、物件が全くないのです。立ち退き期限が迫ってきます。さすがに主人も「大変だな」と言い出しました。私はその言葉にハッとしました。私は主人が大変だと思う前に、私が何とかしよう、私がやらなくてはと、先手先手を打ってしまっていたのです。私が私がという、自己中心の姿、自分の罪に初めて気がつきました。心が、パアッと明るくなりました。そして、住まいが見つからないのは主のみこころであることに、気がつきました。主は最善

をなしてくださる、どんな状況になっても、主がなさることは最善であると信じることができました。それで、住まいが見つからなくても、平安でいられたのです。半年前まで薬にしがみついていた私が、まるで別人のようでした。主人からは、「少しは心配してくれてもいいのに」と言われてしまうほどでした。

三月になっても物件は見つからず、何となく落ち着かない気持ちでいたところ、主人が、「最悪の場合は高校生の息子を祖父母に預けて、下の二人の娘との四人でなら、狭いアパートでも何とかなるのでは」と言い出しました。それを聞いた私は、「どんなボロ屋でも、どんなところでもいいので、家族五人がひとつ屋根の下で暮らせるような住まいを与えてください」と心の中で祈りました。「でも、ひとつ屋根の下で暮らさないのが主のみこころなら、みこころ通りになさってください。主はそのことを通して、私たちに何かを示してくださるのでしょうから。私の願いはこうですが、主のみこころ通りになりますように」と祈りました。このように心から祈れた時、主にすべてをゆだねることができて、本当の平安を得ることができました。

三月に洗礼式があるからと勧められた時、住まいが見つからないのにもかかわらず、私は受洗を決めました。そして、頭の中は洗礼式のことでいっぱいになってしまいました。その四日後、不動産屋さんから、「家が見つかった」と連絡が入ったのです。不動産屋さんが、「今すぐ見に行きましょう」と言うのに、私は、「学校の用事があるので、後でもいいですか」などと言ってしまいました。不動産屋さんは「滅多にない物件だから、今すぐ行った方がいい。車で見に行き、学校までお送りしますから」とまで言ってくれました。私より不動産屋さんの方が必死になってくれ、どんな家でもいいと祈っていたのに、庭付きの３ＬＤＫの家が与えられました。

一九九二年三月二十二日の洗礼式の時は、家族全員が来てくれて、集会の方との交流の場も与えられました。翌二十三日に家の契約を結び、二十四日は娘の卒業式、二十八、二十九日に、慌(あわただ)しく引っ越しをしました。娘の学校のことも、お金のことも、何もかもが整えられて、必要な助け手も与えられました。私は何の計画も立てませんでしたが、主のご計画は完全なのだということがよく分かりました。思いもかけぬ大きな家を与えられたことも、全く不思議なほどの恵みであり、奇跡でしたが、期限の二週間前まで家が見つからなくても、大騒ぎの引っ越しになっても、平安でいられたことが私にとっては一番の奇跡です。また、もし救われていなかったら、私たちにとって高い家賃を払い続けられるのだろうかと、またまた不安になってしまっただろう私なのに、主が祈りの中で与えてくださったのだから「主が必要と思われる間は、必ず家賃が払える。もし、出ていかなければならなくなった時には、次の住まいも必ず与えられる」と確信できました。そして六年後、主はその通りにしてくださり、次の住まいも与えられ今に至っています。

あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分にあります。

（マタイ　6・34）

二人の兄と母のこと

私には兄が二人いました。下の兄、雅(まさし)は四歳年上で、私は小さい頃から、よくいじめられていました。雅は人を見下すようにして、議論好きな人でした。私にもよく最後は、「女だからダメなんだ」と、言われたものでした。それは、私が結婚してからもずっと続きました。二人目の出産で実家に帰っていた二十五歳の時、いつもの通り嫌なことを言われ、半泣きで、逃げるように隣の部屋の布団に入りました。襖(ふすま)一枚隔て

た向こうから、声が聞こえました。母が雅に「あんまりひどいこと言うのやめなよ～」と言うと、雅は「俺、アイツが嫌いなんだよ」と言うのを聞いて、私の心は凍り付いてしまいました。「そうか、私は嫌われているのか。それなら、何を言っても、何をしてもどうしようもないんだな」と思ってしまいました。そのことがあってからというもの、私は雅に対して心を閉ざしてしまいました。どんなに嫌なことを言われても、議論をふっかけられても、「あ、そう」で終わり、それ以上何も言いませんでした。何も感じませんでした。三十八歳でイエス様に救われ、家族のことを祈るようになっても、雅のことは祈りませんでした。祈らないことに罪悪感もなく、心が凍り付いたままでした。

でも、イエス様は、放ってはおかれませんでした。ある日突然、雅から電話がかかってきました。雅が我が家に電話をかけてきたのは、後にも先にもこの時だけで、とても驚きました。大した用事ではなかったのですが、電話を切ったあとから、私自身は雅のことなど考えたくないのに、あれこれと雅のことばかりが浮かびます。その晩も、翌日の土曜日も一日中、雅のことが心から離れず、いつの間にか雅のことを考えているのです。とても嫌でした。次の日は日曜日で吉祥寺へ行きました。礼拝に出て、主の前に頭を下げたら、私にとっては大嫌いな雅ではあるけれど、主から見れば、救いたいと思っておられる魂であり、雅も私も、ただの罪深い哀れな人間であり、何の差もないのだと思い知らされました。自分の傲慢さに気づき、悔い改めさせられました。涙が止まりませんでした。それからは、雅のことを祈ることが出来るようになりました。イエス様の話をしたり集会の話をする機会も与えられました。

もう一人の兄、洋（ひろし）は、一九九六年九月、喉頭がんが再発しました。私は何度もお見舞いに行くことができて、たくさん話をする、楽しい時が与えられました。ベックさんの話や集会の話もできました。十二月に手術をする前には、兄のそばで手を握ってお祈りすることができました。その後は、お見舞いに行く度にお祈りしました。私が祈っている間、洋は、ニコニコ嬉しそうに聞いていたと、兄嫁が教えてくれました。翌年八月末、手術のせいで話せなくなっていた洋は、「自分は天国には入れない。義に劣ることをしてきたから。ごめんね。」と書き残し、その一週間後に意識不明になり、平安の中、五十一歳で召されました。主の憐れみにより、吉祥寺キリスト集会で葬儀をしていただきました。

その頃、下の兄、雅は身体を壊しても、お酒、タバコをやめることができず、食道静脈瘤破裂の再発を繰り返していました。何度も救急車で運ばれては、自分勝手に退院してしまっていました。上の兄、洋が亡くなる少し前の、九七年七月末、大量吐血、下血で緊急入院しました。ＩＣＵの中で、輸血をしては吐血をしてしまうということを、三日間繰り返し、危険な状態でした。麻酔から覚めない可能性もあると言われましたが、全身麻酔で手術をして、一命をとりとめました。その一か月後の洋の葬儀には、まだ入院中でしたが、外出許可が出て、出席できました。また、洋の納骨のため、御代田にも行けました。

しかし、雅は一九九九年九月頃には、腹水が溜まるなど、状態はよくありませんでした。私が初めて合唱で参加した、その年の十一月末のメサイアコンサートには、入院予定日を遅らせて、聴きに来てくれました。「合唱は良かった」と、素直に喜んでくれました。その四か月後に、肝臓ガンで、五十歳で召されました。「イエス様を信じる」という言葉はありませんでしたが、祈りと賛美の中、静かに主のもとに帰りました。雅の葬儀は、母の意向で仏式で行いました。でも、雅が召天

6人の証し

Unser HERR lebt

した翌日に、祈り会の姉妹方がお花を持って実家に来てくれました。賛美と祈りと、穏やかで楽しい交わりの時となりました。母は皆が喪服で来てくれたことも、とても喜んでいました。私には、それが主にある葬儀だったように、思えました。

私の母は、七十歳の時に御代田で洗礼を受け、数年の間、礼拝、火曜の学び会、家庭集会、またドルカス会（みことばのカードなどを手作りで提供するキリスト集会の有志の婦人たちの会）のご奉仕にと参加しておりました。しかし、何が理由かは母は言いませんでしたが、集会から、イエス様から離れてしまいました。聖書も集会の本も全部返してきました。

母にとって長男、次男の召天という、この世においては辛いこともありましたが、イエス様は母を守り、慰めてくださいました。母と言い争いやケンカをしたことはありませんでしたが、母がイエス様から離れてしまった後、私は心の中で母を責め、受け入れられない思いでした。そのような中で、私のイエス様への切なる祈りは「母がイエス様のもとに立ち返ってほしい」、「母に天の御国に帰るその日まで、喜びと平安と希望に満ちた日々を送ってもらいたい」、「もしものときは、キリスト集会で葬儀をし、御代田に納骨したい」という祈りでした。でも目の前の現実は、私の祈りとはかけ離れた状態でした。まるでエリコの壁のように、立ち塞（ふさ）がっていて、希望は全くないように見えました。私は何も出来ないし、母の心を変える事も出来ない。でも、イエス様は、全能なる神であり、何でも出来るお方です。すべてをご存知で、すべてを支配しておられるお方です。そのイエス様に祈り、信頼することで、私は平安をいただきました。

こうした祈りにイエス様は、私の思いも及ばない方法で母に語りかけてくださり、導いてくださいました。そして、私の願いをすべてかなえてくださいました。母は、後のことは、すべて私に任せると言ってくれ、賛美と祈りに「アーメン」と言いました。亡くなる数日前、もう目を開ける力もなくなっていましたが、お見舞いに来てくれた姉妹の、詩篇の朗読に、一緒に口を動かしたりしました。そして、二〇一四年六月十四日、静かに平安に九十一歳で召されました。吉祥寺集会で葬儀をしていただき、御代田に納骨することができました。私も私の家族も、イエス様に愛され、祝福されていることを、改めて思わされました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

主人と私の仕事のこと

話は少し遡（さかのぼ）りますが、私が集会に集い始めるのとほぼ同じ、一九九一年十月から、主人は運転の仕事を毎日するようになって、初めて正社員になりました。それまでは、小中学生に算数・数学を教えていました。家庭教師と塾の中間のような、五、六人の子供のグループ学習指導と週に二回、配送のアルバイトもしていました。正社員になり、毎朝、仕事に出かけ、毎月、決まった日にお給料がもらえて、ボーナスまでもらえるとは。結婚して初めての経験で私は「何て楽なんだろう」と思いました。ところが、それからちょうど一年後の十月、突然、営業所が閉鎖されることになり、三か月後に全員解雇されることになりました。私は仕事のことも、お金のことも、すべてみこころ通りになりますように、と祈っていたので、「これは主が働かれている」と思い、平安でいられました。主人は十二月に解雇され、次の仕事は雇用保険をもらいながら、年が明けてから、ゆっくりと探すつもりだったようですが、雇用保険をもらうための手続きでハローワークに行ったところ、書類不備で一時間ほど待たされてしまいました。その間に、求人票を何となく眺めていたら、主人の希

望通りの仕事があったのです。幼稚園バスの運転の仕事で、主人は、そのために十年程前に、大型免許を取っていたのです。その時にはいくら探し求めても、望んだ通りにはなりませんでしたが、この時はすぐに面接に行き、内定をもらい、勤務は四月からということに決まりました。時間に余裕ができて、家庭集会にも、何度か来てくれました。御代田の「喜びの集い」に何度も一緒に行ったり、メサイアコンサートにも、毎回来てくれました。

私は、救われた時、スイミングのコーチをしていました。うつで、薬を飲んでいましたが、仕事は私にとって現実の苦しさから逃れられる場所でもありました。救われてすぐに、仕事も取られる時が来るかもしれないなと思いましたが、それは自分で決めなくてもいいのだろうな、とも思いました。四年後、交通事故で怪我をしたことをきっかけに、「これは時だ」と思わされてやめました。仕事をやめた後には、上の兄のガンが再発、下の兄が何度も繰り返し吐血、等々、試練と共に、憐れみと恵みの日々でした。仕事をしていないことにも、主のご計画を感じました。

その後、少しずつ、仕事を探し始めました。保育園での朝夕のパートの仕事のことを聞き、いいなあと漠然と思っていました。ある日突然、家の近くの小さな空き地に、保育園が建設され、パートの募集がありました。子育て経験があるということで、応募し、四月から働くことになりました。仕事を始めてから、資格を取りたいという思いを与えられました。五月の連休明けから勉強を始めましたが、試験は八月初めなので三か月しかなく、通信教育では間に合いません。インターネットで調べて独学で学び、試しに受験してみることにしました。毎日、祈りながら勉強しているつもりでしたが、初めの一か月は、かなり熱心に、でも次の一か月は中だるみでダラダラとしてしまい、最後の一か月は焦って勉強するという、いい加減なものでした。でも心の奥底では、イエス様なら受からせてくださるかもしれない、などと甘い考えが浮かぶこともありました。いざ試験会場で問題用紙を見たら、あまりの難しさと学んだことさえ思い出せない現実に愕然とし、絶対に無理だと打ちのめされました。ああ、これはイエス様が、一からしっかりと勉強しなさいと、おっしゃっているんだなと思いました。「イエス様、私は試験を侮っていました。傲慢でした。ごめんなさい」と悔い改め、「自分の姿を見せていただき、ありがとうございます」と祈りました。するとそのあとの問題はすっかり楽になり、緊張することもなく、自分のできるだけのことをしました。試験のあと、全く受かる気のなかった私は、通信教育を受ける準備を始めました。ところが、結果は合格でした。信じられず、何度も何度も合格証を読み直しました。「これは、主のなさったことだ。イエス様の憐れみだ」と確信しました。私に実力がないのは明らかです。私が努力したからではないのです。主が与えてくださったのです。おかげで私は、このことを自分の誇りとする傲慢さから守られました。主のなさることは完全です。

私が救われた当時、家族はメチャクチャ、経済的にも全く先が見えなかったあの我が家が、今こうして、主人が毎日働いてくれて暮らしていられることは、奇跡です。想像したこともなく、望んだことすらありませんでした。イエス様にすべて感謝しています。

心臓手術のこと

二〇一七年七月の健康診断の結果、心臓が明らかに大きくなっているので、精密検査を勧められました。でも夏休み前で予定があり、八月末にやっと受診しました。「手術になるでしょう」とすぐに言われ、病院を紹介されました。心臓弁膜症の大動脈弁閉鎖不全症でした。とても驚きましたが、この事すべて、主がなさっ

ているという確信だけは揺るぐことがありませんでした。

私自身は弱くて臆病な者ですが、主は全知全能のお方で、最善を成してくださいます。その主にすべてをお任せしますと、何度も祈り続けました。主に守られて、手術までの日々を過ごせました。主のご支配の中、人工弁に置換する手術は無事に終わり、二か月半後には仕事に復帰できました。健康だと思っていた私は、手術したことでまた少し弱くされました。病気は数年前からすでに進行していたようですが、母の召天後に見つかったことは主の憐れみであり、本当に良かったと思います。天の御国が更に近く思えることも、大きな恵みです。

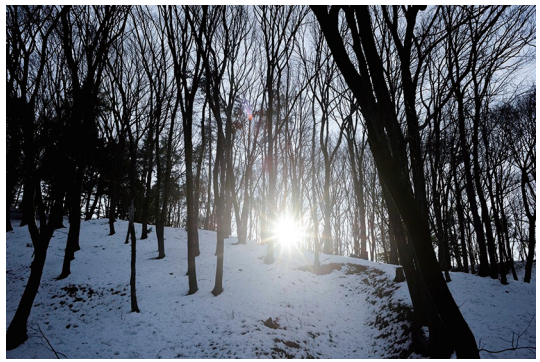
私自身の本質は、救われる前と、何も変わっていません。現実は思い通りに行かないことばかりです。いつのまにか人を傷つけたり、嫌な思いをさせたり、さ

知恵のある者と思うな。主を恐れて、悪から離れよ。それはあなたのからだを健康にし、あなたの骨に元気をつける。

（箴言　3・5〜8）

砂川 夫佐子（すなかわ ふさこ）
一九五三年六月、東京都中野区生まれ、町田市在住、都立西高卒

夫、子供三人、孫三人



6人の証し

Unser HERR lebt

せられたり、自分で勝手に傷ついて相手を恨んだりしてしまいます。聖書にある通り、私は本当に哀れでみじめな人間です。でも、私がどんなに自分を嫌いになっても、イエス様は、私を見捨てず、変わらずに愛し続けてくださいます。こんな私を高価で尊いと言ってくださるのです。もう、自分自身を見るのはやめて、イエス様だけを見上げ、すべてゆだねて祈り続けていこうと、日々、思わされています。

主の山の上には、備えがある。

（創世記　22・14）

人にはできないことが、神にはできるのです。

（ルカ　18・27）

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。自分を

神の国はあなたがたのただ中に

渡辺 美和子



美和子さん（中央）と妹の谷原由紀江さん、操さんご夫妻

私は二十一歳のとき（一九八一年）、福島県矢吹町から、東京にある専門学校に入学するために上京しました。学校の寮に入り、アルバイトをしながら学校へ通っていました。

その一年生の春、アルバイト先で一緒に働く方に対して、自分はその方にどう見られているのだろうかということが、とても気になり始めました。それが遂（つい）には、不安や恐れとなっていきました。

そしてある日の朝、アルバイトに行こうとしたのですが、その方の事が心の重荷となり、その様な自分をどうする事も出来ない現実を前に、私は身動きがとれなくなり、窮地に追い込まれてしまいました。この苦難の時に、私は助けとなるものを何ひとつ持ち合わせていませんでした。私は、心から「神様、助けて下さい！」と、叫んでいました。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

（詩篇　50・15）

その後、アルバイト先に行くと、私の恐れていた方がおられ、私はその方の前に立っていたのですが、不思議と心が穏やかで、恐れがありませんでした。こんな経験は、はじめてのことでした。

そして、今朝私が助けを呼び求めたら、このように私を助けて下さった神様は、いったいどんな方なのだろう、もっと知りたいと思うようになりました。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。

（エレミヤ　33・3）

そのように、神様を探し求めていた夏の日のことでした。ある日曜日に、専門学校で知り合った友人のお宅に遊びに行きました。すると、そこへもう一人別の方が、吉祥寺キリスト集会からの帰りだと言って、友人のお宅へ来られました。そして、集会での様子をいろいろと話して下さいました。そのお話には、宗教がかもし出すある種の雰囲気のようなものは少しも感じられませんでした。

その方は、初対面の私を、軽井沢で行われるバイブルキャンプに誘って下さいました。軽井沢という地名にも心が惹（ひ）かれましたが、何よりも神様の話が聞けるという、このタイムリーな申し出に、私は喜んでバイブルキャンプに参加することにしました。

主イエス様は、求める者に豊かに報いて下さるお方でした。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。

（マタイ　7・7）

6人の証し

人生、最大の出会い

軽井沢では、宣教師のベックさんにお会いして、個人的に聖書のお話を聞くことができました。

その中で、とても印象に残ったことは「私、私、私」という思いが、自分を苦しめていること、それが「罪」だということでした。

私は思春期の頃からずっと自意識が強く、自分が人からどう見られているのかということに、いつも心が捕らわれていて、その事で悩んでいました。けれども、それを誰かに話すことも、相談することも出来ずに、ひとりで抱えて苦しい思いをしていました。

それですから、誰も自分の心の中を知らないはずなのに、どうしてこの方は、私の悩みを言い当てたのだろうかと思い、驚きました。私の悩みは、「人からどう思われるか?」と思い煩い、考えてしまうことによって自分が苦しくなることでしたから、ベックさんの言われたことは、正しくその通りだったのです。その事が、「罪だよ」と言われ、納得することができました。

そのあと、ベックさんの後についてお祈りをしました。それからベックさんは、聖書の中からいくつかのみことばを読んでくださいました。その中で、「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」(1ペテロ5・7)のみことばを聞いたとき、私の心の中に「あなたのことは、わたしが心配します。もういいのですよ」という神様の声が響きました。そして同時に、私の肩にあった重荷のようなものが、鳥の羽がついたように、パタパタッと舞い上がって行ったように思えました。

この時、私は「神様に心配して頂ける人生になったのだ」と思いました。

これまで、自分を助けてくれるもの、心満たすもの、また本物を探し求めてきたけれど、この神様、主イエス様との出会いによって、私の心は完全に満たされ、暗中模索してきたこれまでの人生に、終止符を打つことができました。私は、自分の求めていたところに辿り着いたと思いました。次の週から喜んで吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。

ところが、このように主イエス様に出会い、主イエス様に心配して頂くという、重荷から解放された生活が始まったはずでしたが、いつしかまた、以前のように自分で悩み、自分で心配するようになって、主イエス様を見失ってしまいました。

相変わらず集会には集い、聖書を読み、祈り、交わりはしていても、心に喜びがありませんでした。

主を信じる集会の皆さんは、喜びにあふれて「頑張らなくてもいい。主が成し遂げて下さり、責任をとって下さるからうれしい」と言われます。私はそれを耳にしていましたが、自分の肉の力で歩んでいる者には、本当の喜び、平安がありませんでしたから、うらやましく思うばかりで、その事を理解することができませんでした。「どうして、自分には、喜びがないのだろう?」と思い悩んでいました。そして、「私も祝福して下さい。解放して下さい」と祈っていました。

主からの悔い改め

二〇二一年一月のことでした。妹と電話で話し、交わっているときに、気づいたことがありました。

それは、自分の高慢さでした。私は今の今まで自分が高慢だとは思っていませんでしたので、目からウロコが落ちたような気持ちでした。自分の本当の姿に光があてられて、自分が日常していたことは、とても自己本位なものだったと気がつきました。自分の立場を保持し、自分が重荷を負わせられないようにすることばかりを考えて行動していました。それに加えて、まわりに居る人々は、自分を助けるべきであると考えていました。

権威を認めず、秩序を乱していました。自分は大き

く的が外れていたことに、気がつきました。これ程の自己中心と高慢さがあったことには、自分でも驚きました。

自分の本当の姿、正体を認める事ができました。以前から、自分の本当の姿を見せて頂きたいと願いつつも、それは自分にとっては、大変恐ろしいことのように思えて、とても、心から祈ることができませんでした。

しかし、こうして自分の本当の姿を見せて頂いてみると、それは恐ろしいことではありませんでした。自分の間違いがはっきりとわかったので、それを改めることができ、上にある権威と力を認めて、その下で身を低くし仕えることの喜び、解放、自由を味わうようになりました。

今までは、私の肉である感情、思い、正しさが自分を支配していましたが、ほんとうの支配者であられる主イエス様にすべてを支配して頂けるように、願い祈る者となりました。

そして、主イエス様が、私のゆだねたものを受け取って下さり、最善に成し遂げて下さる恵みを、日々の小さな体験を通して頂くことができるように、今は導かれています。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。（詩篇　119・130）

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

そして、この私の高慢さ（肉の支配）のゆえに、対人関係が破綻（はたん）してきたのだとわかりました。壊れてしまった信頼関係や修復不可能になってしまった対人関係は、私自身に原因があったのでした。私の肉から出た押しつけや強要に対して、相手の方がとられた反発や拒絶の態度は、当然のことであったのだと、受け取ることができました。

今まで悩んでいたことの答えとして、それまで見えなかった事を見える様にして頂き、心が解放されるというお恵みを頂きました。

これまで長きに渡って、肉の力で頑張る生き方でしたが、肉にある古い私はもう既に主イエス様とともに十字架のみわざで死にましたから、肉に支配されるのではなく、それを否定し、十字架の死からよみがえられた主イエス様のいのち（私のうちに宿っておられる聖霊なる主イエス様）を信じ、信頼し、お従いする歩みに導かれていることは、本当に素晴らしく幸いです。ここまで導いてくださった主イエス様に心から感謝致します。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。（ガラテヤ　2・21）

神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。（ルカ　17・21）

いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」（ヘブル　13・5）

6人の証し

Unser HERR lebt

渡辺 美和子（わたなべ みわこ）
一九六〇年　福島県須賀川市生まれ
矢吹町立矢吹小学校、矢吹町立矢吹中学校、福島県立須賀川高等学校、上智社会福祉専門学校卒業

母　渡辺 多美江（たみえ）
妹　谷原 由紀江（たにはら ゆきえ）
弟　渡辺 孝之（たかゆき）

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

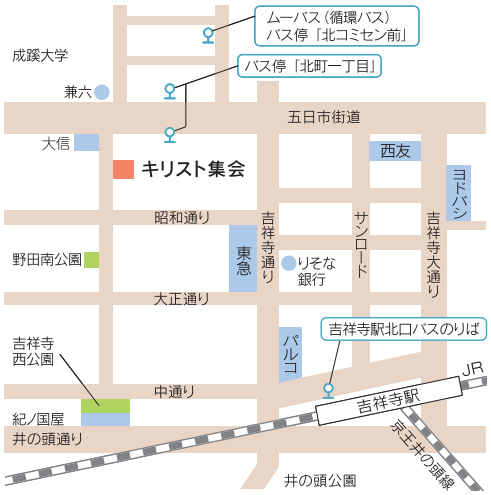
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

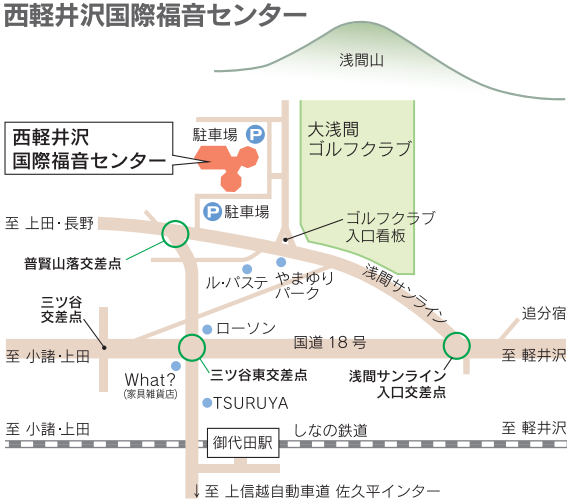
［電話］0422-21-8450（集会所）
東京都 武蔵野市 吉祥寺本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会	10:30 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



西軽井沢国際福音センター



アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分（1000 円程度）
徒歩 約45分＝３Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】
上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分（約7km）

■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

西軽井沢国際福音センター
［電話］ 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
［電話］ 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第58号

定価100円（税込み）2022年1月1日発行

編集スタッフ	岩本秀造　黒澤錬二　鈴木力
	芳我幸雄　福留伸子　牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守恪太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ　http://christ-shukai.net/
出版本を購入されたい方、お問い合わせ　webmaster@christ-shukai.net
また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。